神善を抹殺するものであります。

さり乍ら人間の創造さるゝや、その内面的想念をして相應に由りて外面的想念と相一致せしめなくては成らない理由があるのです。この一致は眞の善人に於て見る所であつて、その思ふ所も言ふ所も、唯々善のみだからであります。かくの如き内外兩面の想念の一致する事は到底地獄的惡人に於ては見る事が出來ない。何故なれば、心に惡を思ひながら善を口に語り全く善人と正反對の情態にあるものです。外面に善を示して惡を抱いて居る。かくて善は惡のために制せられ、之に使役さるゝに至るのであります。惡人はその所主の愛に屬する目的を達成せんがために、表に善を飾つて唯一の方便となすものです。故にその言説と行動とに現れる所の善事なるものは、その中に惡き目的を包藏して居るので、善も決して善ではなく、惡の汚す所となるは明白なものです。外面的に之を見て善事となすものは、その内面を少しも知悉せざるものの言葉であります。

眞の善に居るものは、順序を亂すこと無く、その善は皆内面的想念より流れて外面に出てそれが言説となり行動となるのは、人間は斯の如き順序のもとに創造せられたものであるからであります。人間の内面は凡て高天原の神界にあり、神界の光明中に包まれて居る。その光明とは、大神より起來する所の神眞で所謂高天原の主なるものです。人間には内外兩面の想念があり、その想念が内外互に相隔たり居ることは前述の通りであります。想念と言つたのは其中に意志をも包含して併せて言つたのです蓋し想念なるものは意志より來り、意志なければ何人と雖も想念なるものは有りません。又意志及び想念と云ふ時はこの意志の裡にも又情動、愛、及び是等より起來する

觀喜や悅樂をも含んで居ります。以上のものは何れも意志と關連して居るからです。何故なれば人はその欲する所を愛し、之によつて觀喜悅樂の情を生ずるものだからです。又想念といふことは人が由りて以て其情動卽ち愛を確かむる所の一切を言ふのです。何んとなれば想念は意志の形式に過ぎないものです。卽ち意志が由りて以て自ら顯照せんと欲する所のものに過ぎないからであります。この形式は種々の理性的解剖によつて現れるもので、その源泉を靈界に發し人の精靈に屬するものであります。

凡て人間の人間たる所以は全くその內面にあつて內面を放れた所の外面にあらざることを知らねばならない。內面は人の靈に屬し、人の生涯なるものは、此の內面なる靈（精靈）の生涯に外ならないからです。人の身体に生命のあるのは此精靈に由るものです。是の理によつて人はその內面の如くに生存し永遠に涉りて變らず、不老不死の永生を保つものです。されど外面は又肉体に屬するが故に、死後は必ず離散し消滅し、其靈に屬して居た部分は眠り、唯內面のために、是が平面となるに過ぎないのです。かくて人間の自有に屬するものと屬せざるものとの區別が明かになるのであります。惡人にあつては其言說を起さしむる所の外的想念と、其行動を起さしむる所の外的意志とに屬するものは、一も以て彼等の自有と爲すべからざるものと知り得るでありませう。只その內面的なる想念と意志とに屬するもの而已が自有を爲し得るのであります。故に永遠の生命に入りたる時自有となるべきものは、神の國の榮ゑのために努力した花實ばかりで、其他の一切のものは、中有界に於て剝脫されるものであります。ア、惟神　靈幸倍坐世。

（大正一二、五、二四、舊四、九、於龍宮紀、加藤明子錄）

第一一章　怪道（一六一八）

カークス、ベースの兩人は、俄に四邊の光景一變した大原野の眞中を無言の儘トボ〳〵と、何者にか押さるゝやうに進んで往く。頭の禿げた饅頭形の小さい丘の麓を辿つて往くと其所には、松と櫻の樹が一株のやうになつて睦まじゆに立つてゐる。冬の景色と見ゐて尖つた松葉が風に搖られてバラ〳〵と兩人が頭上にふつて來る。櫻はもはや眞裸となつて風に梢が慄うて居た。

カークス「オイ、ベース、俺達はスーラヤの死線を越ゐて、伊太彦司と共に龍王の岩窟に確に這入つた積りで居るのに、何時の間にか、かう云ふ所へ來てゐるのは不思議ぢやないか。さうして俺の立つた時はまだ夏の終りぢやつたがいつの間にかう冬が來たのだらう。合點の行かぬ事だなア」

ベース「ウン、さうだなア、何とも合點の行かぬ事だ。大方夢を見て居たのだらう。矢張スダルマ山の山腹で樵夫をやつて居た時に、グッスリと眠つて仕舞ひ、其間に冬が來たのかも知れないよ」

カークス「それだと云つて伊太彦と云ふ綺麗な神司とテルの里へいつて、ルーブヤさんの舘に宿り込み結搆な御馳走に預かり、それから船に乘り、スーラヤ山の死線を越ゐた事は確に記憶に殘つて居る。大方今が夢かも知れないよ。夢と云ふ奴は僅か五分か六分かの間に生れて死ぬ迄の事を見るものだ、夢は想念の延長だから、かうして居るのが夢かも知れない。何と云つても夢の浮世と云ふからなア」

カークス「何と云つても此處は見馴ない所だ。いつの間にスーラヤ山から此處へ來たの

だらう。さうして四邊の景色は冬の景ぢや。バインの老木の間から針のやうな枯松葉が降つて來る。櫻は眞つ裸になつて慄つて居る。兎も角も行く所迄行かうよ。又好い事があるかも知れないよ」

ベース「思ひきやスーラヤ山の岩窟に
　進みし我の斯あらんとは。
夢ならば一時も早く覺めよかし
　心の空の雲を晴らして」

カークス「大空は皆黑雲に包まれて
　行手も知れぬ我ぞ悲しき。
ウラル彦神の命の戒めに
　遇ひて迷ふか我等二人は」

ベース「ウラル彦神の教も三五の
　道も御神の作らしゝ教。
我は今途方に暮れて冬の野の
　いとも淋しき旅に立つかな。
伊太彦やブラヴーダ姫は今いづく
　アスマガルダの影さへ見えず」

カークス「村肝の心の暗に包まれて
　今八衢に迷ふなるらん。
天地の皇大神よ憐れみて

我等二人の行方を照らしませ。
月も日も星かげもなき冬の野を
彷徨ふ我等が心淋しさ。
如何にせば常世の春の花匂ふ
我故郷に歸りゆくらん」

ベース「日も月も西に傾く世の中に
我は淋しき荒野に迷ふ。
西いたか東へ來たか知らねども
みないみの罪と諦めゆかん。
西東南も北もわきまへぬ

今幼兒となりにけるかな」

カークス「エヽ仕方がない。犬も歩けば棒に當るとやら云ふ事がある。さアこれから膝栗毛の續くだけ此道を進んで見よう」

茲に二人は風吹き荒ぶ野路の淋しみを消さんが爲に出放題の歌を謠つて足にまかせトボ〳〵と進み行く事となつた。

カークス「あゝ詠かしや〳〵

但しは浮世の眞中か　茲は冥途か八衢か
山野の草木は枯果てゝ　四邊の景色を眺むれば
バインの木蔭に立ち寄つて　露もやどらぬ淋しさよ
見れば枯葉はバタ〳〵と　息休めんと打ち仰ぎ
針の如くに下り來て

薄き衣を刺し通し
冷き風に慄ひ居る
夢か現か 幻か
スダルマ山の間道を
ルーブヤ舘に立ちよりて
姫の命にもてなされ
一行五人スーラヤの
ナーガラシャーの寶玉を
受け取り珍の聖場へ
夢でありしかこれは又
櫻の梢はブル〳〵と
合點の行かぬ此旅路
三五教の伊太彦と
漸く渡りてテルの里
天女のやうなブラヴーダ
それより船に身を任せ
山に鎭まるウバナンダ
神の御爲世の爲に
獻らんと思ひしは
合點の行かぬ事許り

夢の中なる貴人は
尋ぬるよしも泣く許り
我身にひし〳〵迫り來る
犯せし罪の報ひにか
實に怖ろしき今日の空
あて度もなしに彷徨ひて
但しは常世の花匂ふ
神ならぬ身の我々は
暗路に迷ふ苦しさよ
神の光の一時も
今はいづくに在すか
霜の劍や露の玉
これぞ全く今迄の
唯しは前世の因緣か
進みかねたる膝栗毛
地獄の里に進むのか
天國淨土に上るのか
如何に詮術泣く涙
あゝ 惟神 〳〵
早く我身を照らせかし」

迷怪道

ペース『旭は照らず月は出ず
亡者の如く我々は
あてどもなしに進み行く
但しは聖地のエルサレム
深き濃霧に包まれて
あてども知らぬ心地なり
天地に神のましまさば
憐れみたまひて現界か
但しは地獄か八衢か
人は神の子神の宮
星の影さゑ見ゑぬ空
見なれぬ道を辿りつゝ
我行く先は天國か
黄金山か八衢か
大海原を行く船の
あゝ惟神々々
二人の今の身の上を
はた靈界か天國か
いと明けく知らしませ
なりとの教は聞きつれど
かくも迷ひし我靈は
月日の光も左程には
我等も今は漸くに
月の光の尊さを
あゝ惟神々々
一時も早く我胸の
完全に委曲に行方をば
神の御前に願ぎまつる」
斯く謡ひつゝ漸くにして濁流漲る河邊に着いた。
常夜の暗の如くなり
尊く清く思はざりし
いづの御光瑞御靈
正しく悟り初てけり
我等を作りし皇神よ
醜の横雲打ち拂ひ
照らさせたまへ惟神

カークス「オイ、此處には雨も降らんのに大變な濁流が流れて居るぢやないか。斯んな

大きな川を渡らうものなら、夫こそ命の安賣だ。もう仕方がない。二十世紀ぢやないが何も彼も行きつまりだ、後へ引きかへさうか」

ベース「引かへさうと思つても、何者か後から押して來るのだから仕方が無いぢやないか。「慢心致すと神の試に遇ふて行も歸りもならないやうになる」と三五教の教典に示されて居るが矢張り我々は、ソーシヤリズムとか、自由平等主義だとか云つて神樣を輕んじて來た結果こんな狐目に陷つたのだ。どうしても是は現界とは思はれないな。龍神の岩窟で命を取られ此處へ來たのだ。もう斯うなれば覺悟をするより仕方が無いぞ」

カークス「さうだ。どう考へて見ても現界のやうぢやない。お前の云ふ通り、これから駒の頭を立て直し、弱くてはいけないから、假令地獄へ行かうとも大きに馬力を出してメートルをあげ、地獄の鬼を脅迫し、舌を捲かせ、共和國でも建設しやうぢやないか。兎に角今日の世の中は弱くては立てんのだからなア」

ベース「そうだと云つて、我々兩人の小勢では地獄を征服する譯にも行くまい。閻魔大王とか云ふやつが居て帖面を繰つて我々の罪狀を一々讀み上げ焦熱地獄へでも落さうと云つたらどうする。どうせ天國へ行かれる樣な行ひは仕て來て居ないからなア」

カークス「何心配するな。地獄と云ふ所は强い者勝の世の中だ。小さい惡人は嚴しい刑罰を受けるなり、大なる惡人は地獄の王者となつて大勢の亡者を腮で使い、愉快の生活を送らうと儘だよ。閻魔なぞはあるものぢやない。靈界も現界も同じ事だ。現界の狀態を考へて見よ。下にあつて亂すれば刑せられ、上にあつて亂すれば衆人より尊敬せらるゝ、矛盾暗黑の世の中だ我々は弱くてはならない。是から渾を確りと締め

捻鉢巻をして細い腕に撚をかけ、此濁流を向ふに渡り、地獄征服と出かけやうぢやないか。人間の精霊と云ふものは所主の愛によつて天國なり、又地獄へ籍を置いて居るのださうだから、何地獄だつて構ふものか、自分の本籍に歸るやうなものだ。片端から暴威を揮つて四邊の小團体を征服し、大同團結を作り、カークス、ベース王國を建てやうじやないか。何、地獄位に屁古垂れてたまらうかい。何程地獄が辛いと云つても現界位のものだ。現界は所謂地獄の映象だと云ふ事だから、我々は經驗がつんで居る。現界では大黒主と云ふ大將が居るから我々の思ふやうには往かないが、地獄では勝手だ。この腦が一本あればどんな事でも出來るよ」

ベース「さうだなア。どうやら地獄の八丁目らしい。取つたか見たかだ。此濁流を横ぎり、其勢で地獄に侵入し、一つ脅喝的手段を弄して粟散鬼王を平げ、天晴地獄界の勇者となるも妙だ。ヤア勇ましくなつて來た。毒を喰へば皿迄だ。どうせ我々は天國代物ぢやないからなア。アハ、、、、」

斯兩人は河端に佇み泡沫の如き望みを抱いて雄建けびして居る。傍の生へ茂つた茅の中の藁小屋から黒い痩こけた怪しい婆が破れた呉莚を肩にかけ、ガサリ〳〵と萱草を搖りながら二人の前に出て左の手に榎の杖を携へた儘

婆「誰だ〳〵、あた矢釜しい。そんな大きな聲で喋り散らすと、俺の耳が蛸になるわい。貴樣はどこの兵六玉だ。一寸こちらへ來い」

カークス「ハ、、、、。何とまア汚い婆もあつたもんだないかい。物を言ふも汚らはしいわい。何と云つても天下の豪傑兵六玉のカークス王樣だからなア」

婆「ヘン、人の見ぬ所でそつと猫婆を極め込み、慾な事許り致し、何も彼も人の前に

カークス爺だらう。も一匹の奴は何と云ふ兵六玉だい」

ベース『此方は失敬ながら月の國にて名も高きベース樣だよ』

婆『成程さいつも此奴も人氣の惡い面つきだなア。ベースをカークスやうな其哀れつぽいスタイルは何だ。此處は三途の川の渡船場だ。サアこれから貴樣の衣類萬端剝取つてやらう。覺悟を致したがよいぞい。今の先、伊太彥、ブラヴーダの若夫婦が嬉しさうに手を引いて此所を通りよつた。さうして馬鹿面をした、何でも兄貴と見るが、アスマガルダと云ふ奴が妹や妹の婿の僕となつて通りよつたぞや』

カークス『何、伊太彥さんが此所を通られたと云ふのか。何ぞ立派な玉でも持つて居られただらうなア』

婆『玉は澤山持つて居つたよ。粟粒のやうな小つぽけな肝玉やら縮こまつた睾丸やらどん粟のやうな目の玉やらをぶらさげて、悄氣かへつて此處を通りよつた。眞裸体にしてやらうと思つたが貴樣等とは餘程御靈がよいので、此婆も手をかける事が出來ず、此萱の中に隱れてそつと見て居つたら、綺麗なナイスに手を引かれ、あの川の眞中を通りよつた。大方天國へ往くのだらう。併し乍ら貴樣達は此婆の手を經て三途の川を渡らずに一途の河を渡り、直樣地獄へ突き落される代物だ。ても扨ても憐れなものぢやわいのう、オン〳〵〳〵』

ベース『ヤア此奴ア、グズ〳〵しては居られない。此婆を突つ倒かして置いて此河を渡り、一つ地獄征服と出かけやうか、カークス來れ』

ベースの胸倉を取り、三つ四つ搖する。婆は細い痩せこけた手を出して、早くも尻引き捲り、濁流目蒐けて渡らうとする。

ベース「これや婆、どうするんだい。失敬な、人の胸倉を取りやがつて」

婆「取らいでかい〳〵、貴様の肝玉を引き抜いてやるのだ。こら其處な兵六玉、貴様も同様だから待つて居れ。この婆が此所で荒料理をして骨も肉も付け燒にして食つてやるのだ。大分腹が減つた所へよい餌が來たものだ」

カークスは後より婆の足をグッと掴み力限り突けども押せども、地から生えた岩のやうにビクとも動かない。

カークス「ヤア何と腰の強い、強太い婆だな」

婆「定つた事だよ。俺は地の底から生えたお岩と云ふ幽靈婆だ。兵六玉の十匹や二十匹集かつて來た所でビクとも動くものかい」

ベース「こら婆アさん、放さんかい。俺の息が切れるぢやないか」

婆「定まつた事だい。息の切れるやうに掴んで居るのだ。息を切らして軍鶏を叩くやうに叩きつぶし、砂にまぶし、肉團子をこしらへて食つて仕舞ふのだ。こうなつたら貴様達ももう婆婆の年貢の納め時だ。潔う覺悟をして居るがよい」

二人は進退谷まり、如何はせんかと案じ煩ふ折柄、遥か後の方から、宣傳歌が聞えて來た。ハッと思ふ途端、今迄婆と見えたのは河の傍の巨巖であつた。川と見えたのは果しも知られぬ薄原で、其薄の穂が風に搖られて水と見えて居つたのであつた。

（大正一二、五、二四、舊四、九、於教主殿　加藤明子錄）

第一二章　五詫宣（一六一九）

カークス、ベース兩人は不審の胸を抱き乍ら、路傍に直立せる立岩の側に佇んで、宣傳歌の聲の近寄るのを耳をすませて聞いて居る。

伊太彦「三五教の宣傳使　我は伊太彦司なり
玉國別に從ひて　スダルマ山の麓迄
進み來れる折もあれ　木蔭に休む兩人に
不圖出會してスーラヤの　山に夜光の玉ありと
聞くより心勇み立ち　我師の君に許されて
カークス、ベース兩人を　從へ間道潜り抜け
スーラヤ湖邊のテルの里　ルーブヤ舘に立寄りて
神の仕組のブラヴーダ　姫の命と赤繩をば
結び終りて兄とます　アスマガルダの舟に乘り
波に漂ひ漸くに　スーラヤ山に漕ぎつけて
一夜を明かす折もあれ　得体の知れぬ怪物が
忽ちこゝに現はれて　いろはにほへとちりぬるを
わかよたれそつねならむ　うゐのおくやまけふこえて
あさきゆめみしゑひもせす　京味の深い問答を
敗けず劣らず開始して　火花を散らせば怪物は
煙となりて消え失せぬ　夜も漸くに明け放れ

一行五人はスーラヤの　危き死線を突破して
足を痛めつ頂上に　登り終せてウバナンダ
ナーガラシャーの潜みたる　醜の岩窟に立向ひ
山の尾の上に茂り生ふ　藤蔓切りて縄梯子
やつと拵へ吊り下ろし　五人一度にスル〳〵と
下りて見れば思ひきや　果てしも知らぬ廣い穴
際限もなく展開し　山河草木立並ぶ
廣き原野となりにけり　あゝ惟神々々
神の仕組の玉糸に　索かれて來る我々は
何處をあてと白雲の　行ける所迄進まんと

こゝ迄來り息休め　後振り返り眺むれば
如何になしけんカークスや　ベースの二人は落伍して
姿も見ねずなりにけり　あゝ惟神々々
御靈幸はひましまして　一時も早く兩人が
我等の後を追かけて　互に無事を祝し合ふ
喜び興へ玉へかし　醜の岩窟の入口は
いとも狭けく覺ゆれど　此岩窟の廣々と
展開したる不思議さよ　空は岩窟に包まれて
月日の影は見ねねども　何とはなしに心地よし
あゝ惟神々々　神のまに〳〵進み行く」

と云ひつゝ、兩人の傍に近寄つて來た。カークスは三人の姿を見るより飛び立つやうに喜んで、

カークス『あゝ、先生でムりましたか。ブラバーダさんに、アスマガルダさん、どれだけ尋ねて居つた事か知れませんよ。どうして居られましたか』

伊太『いや有難う。實の所はお前等二人の姿が見ねんので又足を痛めて遲れて居るのではあるまいかと、幾度も〳〵路傍に佇み見合せ〳〵やつて來たものだから、斯う遲れて了つたのだ。隨分待たしたゞらうな』

カークス『隨分待ちましたよ。然しこゝは妙な所ですな。只今濁流漲る大川が横はり、汚い婆が現はれて色々雜多と嚇し文句を並べやがるものだから、ベースと二人一生懸命に掛合つてゐましたが其婆は岩と化けて了ひ、川は薄原となりました。一体こゝは冥途じやありますまいかな』

伊太『死んだ覺えもないのに、どうして冥途へ來るものか。こゝはスーラヤ山の岩窟から此通り展開してゐる大きな廣場だ。あんまり廣い穴だから此通り目の屆かん程草原が展開してゐるのだ。何と不思議な事じやないか』

カークス『いや、それ聞いて安心しました。私は又ベースと兩人冥途の旅じやないかとどれだけ氣を揉んだか知れませんよ。なア、ベース、隨分いやらしかつたな』

ベース『婆の出た時は本當に肝潰しましたよ。そして婆が貴方等三人が此川を渡つて向ふへ行つたと嘘ばかり吐きやがるもんだから、早く追付かうと思つて、どれ丈け氣をもんだか知れませんわ』

伊太『ア、さうだつたか、こゝは岩窟内の事だから四邊の光景も違ふて居るなり、何れ

妖怪も出るだらうよ。さア之から奥に行かう。屹度ウバナンダ龍王が玉を翳して待つて居るだらう」

カークス「そんならお伴を致しませう。おいベース、どうやら、此方のものらしいぞ。まア喜んだり〳〵。一つ宣傳歌でも謠つて潔う行きませう」

カークス「不思議な事があるものだ　スーラヤ山の岩窟に
藤で造つた縄梯子　垂らしてスル〳〵と下り
見れば四邊は思ふたより　廣き山川草木が
縦横無盡に展開し　岩窟の中とは思へない
心の迷ひか知らねども　三途の川の渡し場で
お岩幽靈の醜婆が　蒼の中から現はれて
凄い文句を並べ立て　二人の肝玉とり挫ぎ
忽ち岩と化けよつた　いざ之よりは伊太彦の
司と共にある限り　如何なる曲の來るとも
如何で恐れん惟神　神の光に照らされて
曲津の潜む岩窟も　何の苦もなく進み行く
我身の上ぞ樂しけれ　朝日は照らず月はなく
風さへ碌に吹かねども　皇大神の御爲に
進む我身は有難や　八大龍王の其一つ
歡喜龍王と聞いたる　ナーガラシャーの寶をば
伊太彦さんが手に入れて　珍の都のエルサレム

黄金山に獻り　五六七神政の完成を
計らせ玉ふ神業の　その一端に仕ふるは
神代も聞かぬ功績ぞ　あゝ勇ましや〳〵
如何なる枉のさやるとも　神に任せし我身魂
何か恐れん敷島の　神國魂を振り起し
地獄の底迄進み行く　あゝ面白や勇ましや
神は我等と共にあり　神に守られ進む身は
如何なる嶮しき山阪も　濁流漲る大川も
いと安々と進むべし　來れよ來れいざ來れ
勝利の都は近づきぬ　朝日は照るとも曇るとも
月は盈つとも虧くるとも　假令大地は沈むとも
我身の命は亡ぶとも　此神業を果さねば
決して後へは引きはせぬ　守らせ玉へ大御神
御靈の恩頼を願ぎ奉る」

斯く謠ひつゝ進んで行くと禿山の麓に草葺の屋根が一軒建つてゐる。そして屋根は所々洩り幾條も〳〵谷が出來て青い草が生ゐ、下地の竹が骨を出して居る。「ハテ不思議な家があるものだな」と一同は佇んで首を傾けて考へて居る。

そこへ一人の婆が破れ戸を、ガタッカせ乍らニッと現はれ來り、アトラスのやうな斑な顔をして、

婆「これ〳〵、旅のお方、一寸寄つて下さい。澁茶でも進ぜ度いから……隨分お前さ

んも草臥ただらう。お前の草鞋には泥埃の寄生虫が湧いてるやうだ。さぞ足が重たい事だらう」

伊太「ハイ、有難う。然し乍ら御親切を無にするは誠に濟みませんが、少し急く旅ですから又歸りがけにお世話に預りませう」

婆「これ〳〵、お前さんは心得か惡いぞや。此婆が親切に茶を與へやうと云ふのに、何辭退をなさるのか。急く旅じやと云つても一日歩く譯にも行くまい。此處で休んで行かつしやい。結構な〳〵三五教の話を聞かして上げませうぞや」

伊太「貴女は三五教のお方ですか。實は私も三五教の宣傳使でムいます」

婆「お前も何と目の惡い事だな。俺の相貌を見ても神司であるか、神司でないか分らなゝらぬ筈だ。實の所は三五教の高姫と云ふ變生男子の系統、日出神の生宮だが、言依別や東助の沒曉漢に愛憎をつかし、又舊のウラナイ教を開いて此處でお道を說いて居るのだ。まア〳〵聞いて行かつしやい。決して惡い事は云はんぞや」

伊太「あゝ貴女が噂に高き高姫さんでムいましたか。いや初めてお目にかゝります。さうして又三五教を捨てゝウラナイ教へお這入りになるとは、どう云ふお考へですか如何に言依別や東助さんと御意見が合はんと云つても神樣に二つはありますまい。貴女は人間を信用なさるから、そんな間違が出來るのでせう」

高姫「まア〳〵道端に立つて話しても仕方がない。一厘の仕組を敎へて上げますから、とつとゝお這入りなさい。まア綺麗なお姫樣だこと、三五教は夫婦ありては御用が出來ないと神さんが仰有るのだが、今は言依別のド灰殼や東助が幹部を占めて居るものだから、何もかも規律が亂れて……アタ阿呆らしい。宣傳使が女房を連れて……

…何の事じやいな。それだから三五敎は駄目だと云ふのだよ」

伊太「まア兎も角一服さして貰はう。なアブラバーダさん、アスマガルダさん」

ブラバーダ「はい、そんならお世話になりませうかな」

高姫「サア〳〵お世話になりなさい。何と云ふても日出神の生宮だから三千世界の事は此生宮に聞かねば分りはせんぞや」

カークス「もし先生、こんな我の強い婆アさんの所へ休むのは胸が惡いじやありませんか。なア、ベース、一つ先生に歎願してこゝへ這入るのは止めて貰はうじやないか」

ベース「ウン、あまり偉さうに云ふじやないか。澁茶を飲ますと云つて馬の小便でも飲ますか知れないぞ。こりやうつかり這入れまい」

高姫「こりや瓢六玉、何と云ふ事を云ふのだい。嫌なら這入らいでも宜いわい。何だ、泥坊の樣な面して、側から何を横槍を入れるのだ。さア〳〵三人のお方、貴方はどうも利口さうなお方だ。屹度身魂が宜いのでせう。サア遠慮は要らぬ、早うお這入り下さい」

伊太「さア〳〵、カークス、ベースの兩人さん、お前もそんな理窟云はずに這入つたらどうだ」

高姫「これ伊太彥さん、あんな瓢六玉は日出神の舘に入る資格はありませんわい。又這入つて貰ふと家が穢れるから、山門の仁王の樣に門番をさして置けば、それで結構だ」

ノラバーダ「もし伊太彥さん、妾は斯うして五人生死を共にして御用に來たのでムいま

すから、カークス、ベースさんが這入れん宅へはお世話になる事はやめませうか」

伊太「ウン、それもさうだ」

高姫「扨も〳〵分らぬ姫様だな。お前さんは身魂の善惡正邪を知らないから、そんな小理窟を云ふのだよ。此高姫の眼で一寸睨んだら金輪奈落、違ひはせぬぞや。オッホ、、、何分立派な男の中へ混つて宣傳に歩くと云ふやうな新しい女の事だから、さうで此婆の言ふ事は氣に合ひますまい。然し、そこは一つ胸に手を當て、考へたが宜しからうぞや」

ブラバーダ「お言葉でムいますが、妾はカークス、ベースさんに同情して一緒に立番を致しませう。伊太彦様、お兄様、何卒中に入つて高姫さんのお話を聞いて下さい」

伊太「いやお前が外へ居るのに私が中に入る事は出來ない。そんなら私も斷らうかな」

アスマガルダ「そんなら私も斷らう。高姫さんとやら、大きに有難う、又御縁あつたらお目にかゝりませう」

高姫「オホ、、、流石の伊太彦宣傳使も女に掛けたら弱いものだな。涎をくつたり背を下げたり……そんな事でお道が、どうして開けますか」

伊太「高姫さん、そんなら貴女もドッと讓歩して五人ともお世話になる譯には行きませんか」

高姫「エー、仕方が無い。そんならお前さんに免じて入れて上げませう。決して座敷なぞへ上つてはなりませんぞ。庭の隅になつと蹲踞つて居なさいや」

カークス「それ程むつかしいお屋敷へは這入りませんわい。なア、ベース、馬鹿にしてるわ」

ベース『ウン、さうだ。絶對に俺も這入らん積りだ。それよりも高姫に外に出て貰つて茶はどうでもいゝから、結構なお話を聞かして貰はうかい』

高姫『オホ、、、、それはよい思案だ。さうすれば俺の宅も穢さんで都合が好い。俺は此處で坐つてお話するから五人は外に蹲踞つて聞きなさい。それが身魂相應だらう。どれ平易い處から話して上げやうから、よく耳をすまして聞きなさいや』

伊太『アッハ、、、、』

アスマガルダ『ウッフ、、、、』

ブラバーダ『オッホ、、、、』

カトクス『エッヘ、、、、』

ベース『イッヒ、、、、』

（大正一二、五、二四、舊四、九、北村隆光錄）

第一三章　蚊（一六二〇）

人（精靈）の內面情態に居る時は自有の意志その儘を思索するが故にその想念は元來の情動卽ち愛そのものより來るものです。そして其時に於て想念と意志とは一致する。この一致によつて人の內面的なる精靈は自ら思惟するを覺ずたゞ意志するとのみ思ふものです。又言說する時も之に似たるものがありますが只相違せる點は、その言說はその意志に屬する想念そのまゝを赤裸々的に露出することを憚るの情が籠つてゐるものです。その故は人（精靈）が現界に在つた時に俗を逐ふて其生を營みたる習慣がその意志に附屬するに至るからであります。

精靈が內面の情態に居る時は、その精靈（人）が如何なる人格を所有して居たか と

云ふことを明かに現はすものです。この時の精霊は自我に由つてのみ行動するからであります。現界に在つた時に内面的に善に居つた精霊は茲に於て其行動の理性と証覺とにかなふこと益々深きものあるを認め得られるものです。今や肉体との關連を斷ち雲霧の如く心霊を昏迷せしめ、且つ執着せる物質的事物を全部脱却したからであります。之に反し精霊の内面が惡に居つたものは、今や外面的情態を脱れて了ひ、その行動は痴呆の如く狂人の如く、現世に在つた時よりも層一層の癲狂狀態を暴露し、醜惡なる面貌を表はすものであります。彼精霊の内面惡なりしものは今や自由を得て表面を飾る外面情態の繫縛を離れたからです。現世にあつて外面上善美と健全の相を裝ひ理性的人物に擬せんとして焦慮して居たものが、全く外面の皮相を取り除かれたので、その狂質は遺憾なく暴露するに至つたのであります。外面上善人を裝ひ學者識者を以て擬して居た人間は馬糞を包んだ錦繪の重の内の樣なもので、外面より見れば實に美麗なる光澤を放ち人をして羨望の念に堪へざらしむるものですが、その蔽蓋を取り除けて内面を見る時は始めて汚物の伏在せるを見て驚くやうなものです。心霊學者だとか、哲學者だとか、宗教家だとか、種々の立派な人間も外面の蔽蓋を取り去つて見れば實に痴呆癲狂の汚物が内面に堆積され、地獄界の現狀が暴露されるものであります。

現世に在つた時神格を認め神眞を愛し内面の良心に從つて行動を爲せしものは、霊界に入り來る時は直に内面の情態に導き入れられて永き眠より醒めたる如く、又暗黑より光明に進み入りしもの、如きものであります。その思索もまた高天原の光明に基き内面的証覺より發し來るが故に、凡ての行動は善より起り、内面的情動より溢れ出づるものです。かくて高天原は想念と情動との中に流れ入り歡喜と幸福とを以て其内

面を充滿せしめ、未だかつて知らざる幸福を味はふものです。最早かくなりし上は高天原の天人との交通が開けて居るので、主の神を禮拜し眞心を盡して奉仕し、自主の心を發揮し、外的聖行を離れて、內面的聖行に入るものです。かくの如きは三五敎の敎示に由りて、內面的善眞の生涯を送りしもの、將に享くる所の情態であります。併し三五敎以外の敎團に信入したものと雖も、神眞を愛し內面的善に住し神格を認めて奉仕したるもの、精靈も亦同樣であります。

之に反し現世にあつて僞善に住し神を捨て惡に住し、良心を滅し神格を否定し、或は神の名を稱ふる事を耻ぢて、種々の名目にかくれ靈的に研究に沒頭し、凶靈を招致して靈界を探り現世の人間を欺瞞し、又は一旦三五の敎を信じ乍ら心機一轉して弊履の如く之を捨て去り、或は誹謗し、世間の人心を狂惑したるもの、精靈界に於ける內面的情態は全然之と正反對であります。

又內心に神格を認めず、或は輕視し何事も科學に立脚して神の在否を究めむとし、且つ自己の學識にほこるものは、皆惡の靈性であります。たとひ外面的想念に於いては神を否定せず、之を是認し少しは敬神的態度に出づるものと雖も、其內面的精神は決して然らざるものは依然惡であります。何故なれば神格を是認すること、惡に住すること、は互に相容れないからであります。又「吾々は單に神を信じ宗敎を學ぶ位なれば、決して學者の地位を捨てたり、役目を棒に振つて入信はしないのだ。只吾々は神諭の或る文句を信じたからだ。萬々一その神諭が一年でも世界に現はるゝ事が遲れたり聞違ふ樣なことがあつたならば、自分が率先して敎壇を打き潰して了ふ」と揚言し到頭意の如く神の聖團を形体的にも精神的にもたゝき毀し、澤山な債務を後に塗り付

け、谷底へ神柱を突き落し頭上から煮茶を浴びせかけ、尻に帆を掛けてエルサレムを後に又々種々の企てを始めて居る守護神の如きは、實に内面の凶悪なる精霊であります。然し乍ら斯る精霊は表面に善の假面を被り、天人の如き善と眞との言説を弄するが故に、容易に現界に於ては其内面の醜悪を暴露せないものであります。かくの如き精霊が霊界に來り内面的情態に入つて其言説する所を聞き、其行動する所を見る時は恰も前後の區別も知らず、發狂者の如く見ゆるものであります。彼等精霊の凶慾心は爰に爆裂して、一切憎悪の相を現はしたり、他を侮蔑して到らざる無く所在悪の實相を示し、悪行を敢てし殆んど人間の所作なるかと疑はしむる許りであります。

現世にあつた時には、外的事物のために制壓せられ沮滯しつゝあつたけれ共、今や其羈絆を脱し彼等の意志よりする想念に任せて放縱自在に振舞ふ事を得るからです。

彼等が又生前に於て所有した理性力は皆外面に住し、内面に住して居なかつたから、斯の如き悪相を現ずるに到るのであります。而も彼等は他人に優りて内面的に証覺あるものと自信して居たものであります。今日の學者や識者と謂はるゝ人の精霊は、概して外面的情態のみ開け、内面は却て悪霊の住所となつて居るものが大多數を占めて居るやうであります。

(*)　(*)　(*)

高姫「これ、お前さん等、何が可笑しうてさう笑ふのだい。千騎一騎の此場合、笑ふ所じやムるまい。變性男子樣の教にも「座敷を閉めきりてヂッとして居らんと、笑つて居るやうな事では物事成就致さん」とありますぞや。五人が五人とも揃うて笑ふとは何の事じやい。此日出神を馬鹿にしてるのじやあるまいかな」

カークス「何、馬鹿にする所か、私達五人は高姫さんに馬鹿にされて馬鹿になつて、此道端でお話を聞かうと思つてるのです。なあべース、さうだらう。これも旅の慰みだからな。立派な先生があり乍ら三五教の謀反人、ウラナイ教の高姫さんに説教を聞く者がありますか。あんまり名高い高姫さんだから、一つ話を聞いてやるのですよ」

高姫「オッホ、、、、盲蛇に怖ぢずとやら、困つたものだわい。斯う云ふ代物も神様は清度遊ばすんだから、並や大低の事じやないわい。日出神や大神様のお心を察しまして おいとしう厶りますわいな。オーン〳〵〳〵。日出神様、斯くの如く憐れな身魂ですから、何卒虫族だと思つて腹を立てずに、神直日大直日に見直して助けてやつて下さい。どうして又世の中は斯うも曇つたものだらう。俺もこゝで足掛二年も大彌勒さんの教を傳へて居るのに、唯一人聞く者がないとは、如何に暗がりの世の中とは云へ、困つたものだな」

カークス「お前さん、たらさうに善人らしく、智者らしく、神さんらしく仰有るが、肝腎要の内面的狀態は地獄的精神でせうがな。此カークスは斯う見ても精神の内面狀態は……へン……第一天國に感應して居るのだから、お前さんの云ふ事が、何だか幼稚で馬鹿に見て仕方がありませんわ。ウッフ、、、」

高姫「オッホ、、、何とまあ没曉漢だこと。現在目の前に底津岩根の身魂が現はれて居るのも分らず、第一靈國の天人、珍の神柱高姫が言葉を幼稚だとか、馬鹿に見るとか云ふて居るが、ほんに困つたものだな。丹波の筍じやないが、煮ても焚いても喰はれない代物だ。それでも人間の味がして居るのかな。伊太彦さん、お前も大

低じやなからうな。假令千年萬年かゝつても誠の道に歸順させる事は難かしいよ。如何な此大彌勒の御用する高姫でも、此代物には一寸、手古摺らざるを得ないからな」

カークス「ヘン、いゝこつ岩根の大彌勒さんだけあつて隨分粗忽な事を仰有るわい。靈國の天人じやと仰有つたが如何にも無情冷酷の天人イヤ顛狂人と見ゐる。神の道には好き嫌ひは無い筈、それに結構な神樣の生宮を捉まへて這入ると家が穢れるの、なんのつて仰有るから恐れ入るわいウッフ、、、」

高姫「お前のやうなコンマ以下に相手になつて居つたら日が暮れる。さア伊太彦さん、お前は一寸利口さうな顏して居るが、高姫の云ふ事は耳に入るだらうな」

伊太「もとより愚鈍な私、賢明な貴女の仰有る事、どうせ耳に入りますまいよ。平易簡單に仰有つて下さい。どうぞお願ひ致します」

高姫「あ、よし〳〵、お前の方から、さう出れば何も文句はないのだ。然し乍ら此大彌勒さんに敎へてやらうと云ふやうな態度に出たら大間違が出來ますぞ。それこそアフンとして尻がすぼまりませぬぞや。結構な〳〵大神樣の一厘の仕組、之が分つたら俺も私もと高姫の足許に寄つて來るなれど、あまり身魂が曇つておるから何も申されぬが、兎角改心が一等ぞや。これ伊丹彦さん、傷み入つて改心するなら今じやぞゐ。後の後悔間に合はぬ。毛筋の横巾でも間違ひはないぞや。大彌勒の神に間違ひはないぞゐ。高姫が申しても高姫が申すのではない。口借らばかりじやから愼んでお聞きなさい。分つたかな。分つたら分つたと、あつさり云ひなさい。これ丈け說敎したら分る筈だから……」

伊太「根つから分りませんがな。もつと詳しく簡單明瞭に仰有つて下さいな」

高姫「何と頭の惡い、これ丈け細かう云ふてもまだ分らぬのかな。何程簡單に言つても肝膽相照さない伊丹彥さんにはイタ〳〵しいぞや」

カークス「何だ、譯の分らぬ能書ばかりを吹聽して、肝腎の事は一つも云はんじやないか」

高姫「エー、默つて居なさい。お前等の下司身魂に分るもんか。此高姫は底津岩根の大彌勒と分れば宜いのだ」

伊太「そりや分つて居ります。その大彌勒が又どうして斯樣な處でお一人お鎭まりになつてるのでせうかな」

高姫「「龍は時を得て天地に蟠り、時を得ざれば蚯蚓蠑螈と身を潛む」と云ふ事がある。何程天地の大先祖の〳〵、も一つ大先祖の底津岩根の大彌勒さんでも時節が來ねば身を落して衆生濟度をなさるのじやぞね。此高姫を見て改心なされ。此世の鑑に出してあるのだよ。別にエルサレムとか齋苑館とかコーカス山とか甘粕大尉山へとかへ行かなくても此高姫の云ふ事を腹に締め込みて置いたら世界が見ねすきますぞや」

伊太「どうもハッキリ分りませんがな。餘程甲粕御魂と見ねますわい。アハ、、、」

高姫「これ程細かく云つても未だ分らぬのかいな。さうするとお前は一寸落して來て居るのだわい。一体誰のお弟子になつてゐたのだな」

伊太「玉國別の先生に教養を受けて居りました」

高姫「何だ。あの玉かいな。彼奴は音彥と云つてフサの國の本山にも、俺の宅の門掃をして居つた奴だ。彼奴は反叛者でな。自轉倒島の魔窟ケ原でも後足で砂をかけて逃

ゆて行つた不人情者だ。あんな者が天理人道が分つて堪るもんかい。五十子姫と云ふ阿婆摺れ女郎を貰つて玉國別だ等と云ふ名で其處邊りを歩き廻つて居るのだから臍茶の至りだ。オッホ、、、、何とまア三五教も人物拂底だな。之では瑞の御靈が何程シャチになつても駄目だわい。それだから底津岩根の大彌勒さんの肝腎の事が分らぬと申すのだ。さア伊太彦さん、こゝが宜い見切り時だ。天國に上るが宜いか地獄に落ちるが宜いか、一つ思案をしなされや。チット許り耳が伊太彦でも辛抱して聞いて見なさい。利益になりますよ」

伊太「高姫さん、もうお暇致します。私は玉國別様が大切なお師匠様、そのお師匠様の惡口云はれて、どうして默つて居られませう。さア皆さん、歸りませう」

カークス「萬歳々々始終臭ひの婆々萬歳」

ベース「退却々々本當に誠に退屈々々」

高姫「これお前は三五教の宣傳使じやないか。怒る勿れと云ふ掟を知つてをるか。さう二つ目には腹を立て、歸るとは何の事だい。それで宣傳使と云はれますか。お前のやうな無腸漢が居るから三五教の名が日に月に落ちるのだ。よい加減に馬鹿を盡して置きなさい」

ブラバーダ「思ひきや高姫様に廻り會ひ
　　醜の教を授からんとは」

高　姫「思ひきや三五教の神司
　　闇と枉とに包まれしとは」

伊太彦「思ひきや斯程に自我の强烈な

ウラナイ教の高姫婆さんとは」

アスマガルダ「思ひきや斯んな處にウラナイの醜の婆さんが構へゐるとは」

ベース「思ひきやウラナイ教の高姫の減らず口でも之程迄とは」

カークス「とは〳〵と問はず語りに高姫が囀る言葉こゝで聞くとは」

伊太「高姫さん、お邪魔を致しました。さア之でお暇を致します。どうかトワに御鎭座遊ばしませ」

カークス「まあゆつくりと此破れ家で一人居りなさい。よく宣傳が出來る事でせう。イヒ、、、」

高姫「こりや、カークス、何と云ふ無禮な事を申すのだ。貴樣の骨を叩き割つてカークスにしてやらうか」

カークス「そんならカークスベース（蚊燻べ）にして貰はうかい。たかと云ふ蚊が居るのだから面白からうよ。ヒ、、、メ、、、」

高姫「伊太彦の鼬見た樣な奴についてる者に碌な奴はありやせないわ。ブラバーダだのアスマガルダだのと、曲つた腰付でブラ〳〵と迂路付きやがつて鼬に屁をかまされた樣な顏付してイッヒ、、、、あゝ衆生濟度も並大低じやないわい」

アスマガルダ「高姫さん、お前さんは何時の間に、スーラヤの死線を越へて此岩窟に來たのだい」

高姫『オッホ、、、馬鹿だな。一つ手洗を使ふて來なさい。こゝは岩窟の中じやありませんよ。フサの國テルモン山の麓、高姫高原の神館だ。夜中の夢を見て世の中をぶらついて居るのだな。妹の婿の尻を追ふて歩く代物だから、どうせ碌な奴じやないと思つたが、矢張日出神が一目見たら違はんわい。何と云ふても金挺撃だから何にも分らぬ、困つた人足だな』

アスマガルダ『何、言はして置けば際限もなき雑言無禮、こう見ても俺はスーラヤの海で鍛へた腕だ。覺悟せい』

と鐵拳を揮つて毆りつけんとする。伊太彦は早くも其腕を掴んで、

伊太『待つた〳〵、三五教は無抵抗主義だ。さう亂暴な事しちやいけません』

アスマガルダ『それだと云つて餘りじやありませんか』

伊太『そこを辛抱するのが誠の道です。堪忍五萬歳と云つて堪忍は無事長久の基ですからな』

アスマガルダ『そんなら伊太彦さんの命令に從ひませう。エー殘念な……』

高姫は腮をしやくり乍ら、

高姫『イッヒ、、、無抵抗主義の三五教、お氣の毒樣』

と大きな尻をブリン〳〵と振り乍ら、裏の柴山を獅子の如くに駈け上り、何處ともなく姿を隱して了つた。五人は又もや宣傳歌を謠ひ乍ら露おく野邊を悠々と進み行く。

（大正一二、五、二四、舊四、九、於龍宮館　北村隆光録）

第一四章　嬉し涙（一六二一）

黒雲濛々として天地四方を包み、夜とも晝とも見別のつかぬやうな光景となつて來た。吹き來る風は何となく腥く、且つ濕つぽく、表面は冷たく、ぢこやらに熱氣を含み、體から沾つた汗の滲む空氣である。伊太彦一行は足に任せて、方向も定めず、膝栗毛の續く限り進んで行くと、相當に高い岩骨の山の麓に行き當つた。相當に高い山らしいが、五合目あたりから、灰色の雲が包んで巓を見る事が出來なかつた。一行は此山を登るより道がない。針のやうな草や、荊の間を種々と苦心して右へ避け左へ避け、板壁のやうな嶮しい所を登つて往く。四方八方から、何とも知れぬ悲しいやうな嫌らしいやうな泣聲が聞ゑて來る。猿の聲でもなければ秋の夕の虫の音でもない。實に絶望の淵に沈んだ時のやうな嘆聲である、一行は天津祝詞を奏上せんとしたが、どうしても唇が强直して聲を發する事が出來なかつた。灰色の雲の中へ身を沒するやうになるとスーラヤ山の死線を越へた時のやうな再び不快の氣分に襲はれた。一同は不言不語運を天に任し、伊太彦の後に從ひ登つて往くと、山の巓は、蠣殼を打ちあけたやうな小石が一面に被さつて居て恰も劍の山を登るが如くであつた。伊太彦は頂上のバラの花のやうな形した岩の上にソッと腰を下した。後れ馳せながら四人はへト〳〵になり、顏色蒼白め、唇を紫色に染め、さも絶望の淵に沈んだやうな面貌で辿りつき、氣息奄々として夏犬のやうに舌を垂らし、胸に浪をうたせながら蠣殼のやうな小石の上に倒れて仕舞つた。

其處へ下の方からスタ〳〵偉い勢で登つて來た一人の婆がある。一同の眤古垂れ

た姿を見て婆は大口を開いて、

婆『オホ、、、。これや伊太に阿魔女に三人のガラクタ共、往生致したか。もう此處迄來た以上は往も戻りもならず、此處で露の命を捨て、八萬地獄へ落ちるのだが、夫でもお詫を致して助けて貰ふ氣はないか。三五教の宣傳使だなど、申て、よくも〳〵世界を股にかけて歩きよるな。俺を誰だと思ふて居るか。高姫の守護を致して居る銀毛八尾の大お稲荷様だぞ。これや開いた口が窄まるまい。一口でも喋るなら喋つて見い。アスマガルダの馬鹿者が、此方の肉の宮を打擲せんと致し嚇かしやがつた爲めに、此方の生宮は、とう〳〵我家を飛び出し行衛不明となつて仕舞つたのだ。恨を晴らさうと思ひ此方の計略によつて、此山に踏み迷はしてやつたのだ。サア、心を改めてウラナイ教に歸順致すか。どうだ、きつぱりと返答致せ。いや〳〵返答は出來まい。耳は聾い、口は開かず。言葉も出んものだから、併し耳は少し聞ゐるだらう。此方の申すやうに致すなら首を縦にふれ。ても扨てもいげつないものだなアても扨ても小氣味よい事だなア、オッホ、、、、」

伊太彦は發言機關の止まつた悲しさに、一言も發する事を得ず、頻に首を横に振つて居る。外四人も伊太彦に倣らつて機械人形のやうに首を横に振る。

婆『てち扨ても、どこ迄太い奴だなア。絶体絶命の場合になつても、まだ俺の云ふ事が分らんのか。銅屑の靈と云ふものは因果なものだなア。これや伊太彦』

と笑の笞をふり上げて、伊太彦の頭を續け打ちに十二三打ち續けた。頭部からは、花火の薄のやうに血がポト〳〵と線を劃して流れ出づる其痛ましさ。伊太彦は目をつぶつたまゝ、假令死んでも三五教の教は捨てぬ。如何な責苦にあつても、ウラナイ教に

歸順するものかと益々首を横に振る。婆は又々鞭を加へる。此体を見たベースは驚いて、そろ〳〵首を縦に振り出した。妖婆はさも嬉しさうに、忌やらしい笑を泛べて、

婆「オホ、、、。お前はベースだな。よし〳〵偉いもんだ。本當に水晶玉だ。五人の中でお前一人。「改心すれば其日から樂になるぞよ」と仰有るのだから、みせしめのため此處で一つお前に天國の樂みを與へてやらう」

と云ひ乍ら、懐から、小さい玉のやうなものを取り出しブー〳〵と口に當て吹くとフワリとした綾錦の坐布團が七八枚、其處に現れた。

婆「ホ、、、、これやどうだ、銀毛八尾樣のお働きはこんなものだよ、さあベース、さぞ足が痛からう。此上に坐りなされ。さあチャッと坐りなされ。そして、腹が空いたざらう。此玉を吹きさへすればお前の望み通りの美味の物が出て來るのだ」

と云ひ乍ら、ベースの體を鷲掴みにして七八枚重ねた柔かい布團の上に坐らした。ベースは四人の者に氣兼し乍ら坐つた。婆はいろんな果物や、蒲萄酒なぞを玉を吹ひては拵へ、ベースに與へて居る。アスマガルダも、ブラバーダも、カークスも伊太彦同樣で依然として首を横に振つて居る。妖婆は之を見て、さも慨歎したやうに、

婆「でも扨ても因縁の惡い身魂だなア。此のやうに結構にして助けてやらうと思ふのに、こんな責苦に遇ふてもまだ我を立て通しよる。何奴も此奴も首を横に振りやがつて、エ、俺が善惡の鏡を出して見せてやらう。皆がベースのやうにすればよいのだ。俺だつて何も此樣なひどい事をしたくはないが、入岐大蛇樣からの御命令だから仕方なしにやるのだ」

と云ひ乍ら又もや笑の笞で三人を打ち据ゑる。流血淋漓として目も當てられぬ無慘さ

四人は運を天に任して心の中に神を念じて居た。何處とも無く山岳も崩るゝ許りの犬の聲

「ウーワウ〳〵」

此聲を聞くより妖婆は忽ち銀毛八尾の正体を現はし。倒けつ轉びつ雲を霞と逃げて行く。伊太彦、ブラバーダ、アスマガルダ、カークスの四人は此聲の耳に入るや俄に元氣回復し言靈を自由に發する事を得た。さうして今迄濡つて居た血潮は痕跡も留めず、元の如く元氣よき面貌となり矗と立ち上り、天津祝詞を奏上した。ベースはと見れば猿取剌の中に突つ込まれてウン〳〵と唸つて居る。

伊太「あゝ惟神　靈幸倍坐世」

三人も一度に

「惟神　靈幸倍坐世」

カークス「もし伊太彦の宣傳使樣、怪体の事があるものぢやありませんか。高姫の守護神奴がこんな所迄やつて來まして、我々を試みやうと致しましたが、犬の聲が聞ねると忽ち正体を現はして、逃げて仕舞つたぢやムいませんか。矢張神樣は信仰せねばなりませんなア」

伊太彦は有難涙を流し乍ら、

伊太「ア、、何とも有難くて言葉も出ませぬわい。時にベースは何處へ行つたのでせうな」

アスマガルダ「こゝの猿取剌の中に眞裸体にせられ血塗になつて苦しんで居ます。何とかして助けてやりたいものですなア」

伊太「我々一同が神様にお願ひして救ふて頂くより仕方がないなア。サアお願ひせう」

と茲に四人は一同に天津祝詞を奏上し、ベースの取違をお詫し、稍暫し汗みどろになつて祈願を凝らした。ベースはウン〳〵と唸つて居る許りである。其處へ忽然として猛犬スマートを引き連れて現はれたのは初稚姫の精靈であつた。四人は姫の姿を見るより喜びと驚きとにうたれ暫時、言葉もなく、姫の端麗なる顏を見詰めて居る。

初稚「伊太彦さん、貴方は試驗に及第致しました。サア、これからウバナンダ龍王の玉を受取つて聖地にお出なさいませ。妾は貴方がスーラヤ山にお登りになつたと聞きスマートと共に船を雇うて當山に登り貴方の身の安全を守護して居りました。最早安心なさいませ」

と云ひながら迦陵嬪伽のやうな麗しい聲を出して天津祝詞を奏上したまふた。ハッと氣がついて見れば伊太彦以下四人は龍王の岩窟に、邪氣に打たれて倒れて居たのである。

伊太「あゝ矢張り此處は龍王の岩窟でムいましたかなア。大變な所へ往つて居りました よくまアお助け下さいました。有難うムいます」

外四人は嬉し涙を垂らしながら、兩手を合せ、初稚姫を伏し拜んで居る。斯る所へ岩窟の奥の方より、鏡の如く光る大火團現れ來り、一同の前に爆發するよと見る間に、得も云はれぬ優美高尚なる美人が、十二人の侍女を從へ現はれ來り、初稚姫に向ひ手を仕へ、

龍女「妾は神代の昔より大八洲彦命 様に改心の爲め此岩窟に閉ぢ込められ、今迄修業を致して居りましたウバナンダ龍王でムいます。此度神政成就について如何なる惡

神もお赦し下さる時節が參りましたので、誰かお助けに來て下さるだらうと、今日迄この寶玉を大切に保護して待つて居りました。所が伊太彦の宣傳使樣が四人の伴を連れて、お出でになりましたが、斯う申すと何でムいますが、もう些し御神力が奥さんに引かされて薄らいで居ますので、私が解脱する事も出來ませず、困つて居りました。すると伊太彦樣外御一同は龍神の毒氣に打たれ、精靈が脱け出され死人同樣になられ困つた事だと思つて居ました所、神力無限の貴女樣がお出になりまして言靈を聞かして下さつたので、昔の罪障も解け、執着心も取れて今迄の醜しかつた姿も消え、こんな天女となりました。併しこの玉は伊太彦さんにお授け致しますから、エルサレムに行き此玉を獻じお手柄をなさつて下さい。妾は十二人の侍女と共に天に登り、ハルナの都の言向け和しに影乍らお助けを申ます」

と云ひながら夜光の玉を伊太彦に渡した。伊太彦は手足を慄はせ乍ら押し戴き、叮嚀に布を以て包み懐に入れた。

初稚「龍王殿お目出度うムいます。嘸神樣も御滿足遊ばす事でムいませう」

龍二「ハイ、お蔭で助けて頂きました。此御恩は決して忘れは致しませぬ」

龍　王「久方の天津國より天降りませし
　姫の命に救はれにけり。
いざさらば天津御國にまいのぼり
　月の御神に仕へまつらん」

初稚姫「古ゆ、暗きにかくれたまひたる
　汝が命を救ひし嬉しさ。

久方の月の御國に登りまさば
我神業を傳へたまはれ」

龍　王「有難し此有樣を委曲に
申上なん月の御神に。

伊太彥「タクサカのナーガラシャーを言向けて
心傲りし我ぞうたてき」

ブラヴーダ「脊の君の嚴の力を包みたる
妄は醜の曲津神なりし。
さりながら心改め今よりは
神の大道に專ら仕へん。

初稚姫「皇神をまづ第一と崇めつゝ
伊太彥司をいつくしみませ」

ブラヴーダ「有難し姫の命の御敎は
胸に刻みて忘れざらまし」

アスマガルダ「伊太彥やわが妹に從ひて
思はぬ惠に逢ひにけるかな」

カークス「もろ〳〵の神の試に遇ひながら
今は嬉しき光見るかな」

ベース「曲神にたぶらかされて思はずも
道に背きし我ぞ悲しき。

暗國の山の尾上に登りつめ
心を變へし身の恥かしさよ。
御惠の限知られぬ皇神は
此罪人も赦したまひぬ」

初稚姫「いざさらばウバナンダ龍王永久の
住家を捨てゝ御國に入りませ」

龍　王「ありがたし姫の命の御言葉に
天翔りつゝ神國に往かん」

かく互に歌を取り交し龍王に別れを告げた。龍王は十二人の侍女と共に岩窟より雲を起し空中に舞ひ上り、忽ち姿は煙の如く消えて仕舞つた。初稚姫は岩窟の細き穴を傳ふて磯端に出た。此處は平素波荒く巨巖屹立し船の近づく事の出來ぬ難所である。さうして外へ出れば底ひも知れぬ水の深さに、船を置く場所もなく、スーラヤの湖の大難所と稱へられ、船人の恐れて近寄らなかつた所である。初稚姫、スマートの後に從ひ五人は細い穴を潜つて出て見ると其處は玉國別、治道居士の一行が船を横付けにして待つて居る。伊太彦は飛び立つばかり喜んで船に飛び乘り、玉國別に獅嚙みつき嬉し泣きに泣いて居る。玉國別も唯、嬉し涙に咽んで落涙する許りであつた。あゝ惟神　靈幸倍坐世。

（大正一二、五、二五、舊四、一〇、於教主殿　加藤明子錄）

ひのもとの本つ教をよそにして
　卑しき道にまよふおろかさ
せめきたる天つしこめを憎まずに
　和めすかして救ふこの道
すめ神は惠の鞭を加へつゝ
　心のねむりさましたまへり

第四篇　四鳥の別

第一五章　波の上（一六二二）

玉國別、初稚姫二人の乗り來れる二叟の船は伊太彦以下四人を分乗せしめ、スーラヤの湖面を西南に向つて走け出し、折柄の順風に眞帆をあげてエルの港に進み行く。

初稚姫の船にはブラバーダ、アスマガルダ、カークス、ベースが乗せられた。玉國別の船には伊太彦が只一人乗つて居る。

漂渺として際限もなき湖面を渡り行く退屈紛れにいろ〳〵の成功談や失敗談に花が咲いた。眞純彦は伊太彦に向ひ

眞純『伊太彦さん、隨分お手柄でムいましたな。まアこれで貴方も夜光の玉が手に這入つて御不足もありますまい。何と云つてもタクシャカ龍王を言向和すと云ふ勇者だ

から、到底我々はお側へも寄れませんわい」

伊太「いやもうさう言はれては面目次第もありません。實の所ウバナンダ龍王は、拙者には神力が足らんからお渡しせんが、初稚姫様ならお渡しすると云つて散々文句言つて渡して呉れたのですよ。サッパリ今度は失敗でしたよ。アハ、、、」

眞純「然し伊太彦さん、貴方はブラバーダとか云ふ奥さんが出來たさうですな」

伊太「いや、どうも痛み入ります。何程斷つても先方が肯かないものですから、又親子兄弟の懇望によつて豫約丈けはして置きました。然し乍らまだ正妻と云ふ譯には行きません。兎も角先生のお許しを得なくちやなりませんからな。ウバナンダ龍王が云ふには、伊太彦司は女に心をとられて居るから神力が弱つたと云ひましたよ。別に女等に心をとられては居ないのだが不思議ですな」

玉國別、三千彦は可笑しさを堪へて俯向いてクウ〳〵と笑ふて居る。

眞純「伊太彦さん、貴方に限つて女に心をとらるゝと云ふ筈はありませんが、大方龍王の奴、岡嫉妬をして、そんな事云つて揶揄つたのですよ。本當なら初稚姫さんに渡すべき玉を貴方に渡したじやありませんか。ブラバーダさんがお側に居ると思つて貴方に渡したのですよ。さう云へば何かお心に障るか知りませんが、そこはそれ、奥さんの手前、龍王さんも氣を利かしたのですわい。アッハ、、、」

伊太「いや〳〵決して〳〵、そんな譯じやありません。到頭あの山の死線を越えて岩窟に這入つた所、神力が足らんので一行五人とも邪氣にうたれ、假死狀態に陷り、幽冥界の旅行と出掛け、ウラナイ教の高姫に會ふて一談判をやり、つまらぬ小理窟を

振り廻し、暗い〳〵原野を進んで行くと針の様な山にぶつつかり、それは〳〵ちらい目に會ひましたよ。そこへスマートさんが現はれ、次いで初稚姫様が現はれて高姫の守護神を追拂ひ。再び現界へかへして下さつたのですよ。いやもう思ひ出してもゾッと致しますわ。「功は成り難くして敗れ易く、時は得難くして失ひ易し」とか云つて仲々世の中は、うまく行かんものですわい。知らず〳〵に何時の間にか慢心し、夫婦氣取りでやつて行つたのが私の失敗、高姫の奴に幽冥界に於ても大變な膏をとられましたよ」

眞純「貴方は何故死線を越ねて死生を共にした奥さんを初稚姫にお渡しゝたのですか。あまり水臭いじやありませんか」

伊太「いゝね、エルの港迄お世話になつたのですよ。又船の中で貴方等に冷かされると困りますからな」

眞純「いや伊太彦さんは三千彦さんの御夫婦に就いて揶揄つたので機を見るに敏なる伊太彦さんの事だから豫防線を張つたのでせう」

伊太「アハ、、、、それ迄内兜を見透かされては仕方がありませんわい」

三千「伊太彦さん、隨分冷かされるのは苦しいと見ねますな」

伊太「三千彦さん、こんな處で敵討とは、ひどいじやありませんか。いやもう貴方御夫婦の事は申しません。何卒何事もスーラヤの水と消して下さい」

三千「決して敵討でも何でもありませんよ。人に揶揄はれる時の御感想を承はり度いと思つた丈けですわ。然し先生、伊太彦さんの緣談はお許しになるでせうね」

玉國「三千彦さんの夫婦を承諾したのだからな」

伊太『ヤア先生、有難う厶います。そのお言葉でお許しを得たも同然と認めます』

玉國『まだ私は許して居りません。然し乍ら結婚問題は當人と當人との自由ですから、そんな點までは干渉しませんわい』

伊太彦はつまらな相な顏して頭を掻いて居る。治道居士はニコッともせず、目を塞ぎ腕を組み、此問答を一生懸命に聞いて居る。バット、ベルも治道居士の傍に小さくなつて伊太彦の顏ばかり見つめて居る。

玉國別『神ならぬ玉國別は皇神の
　結ぶ赤繩を如何で論爭はんっ
　伊太彦の神の司は皇神の
　御言のまゝに從へば宜し。
　皇神の任さし玉ひし神業を
　遂げ終るまで心しませよ』

伊太彦『有難し我師の君の御心は
　その言の葉に知られけるかな。
　皇神の結ばせ玉ふ緣なれば
　否むによしなき伊太彦の身よ』

眞純彦『月の國ハルナの都に立向ふ
　旅にも芽出度き話聞くかな。
　言靈の軍の君も春めきて
　花の色香に醉ひつゝぞ行く』

三千彦『若草の妻定めてゆ何となく
心苦しく思ひつゝ行く』

眞純彦『苦しさの中に樂しみあるものは
妹背の旅に如くものはなし。
苦しみと口には云へど心には
笑みと榮ゆの花匂ふらん』

デビス姫『眞純彦神の司の言の葉は
妾の胸によくもかなへり』

眞純彦『デビス姫その言の葉は詐りの
なき眞人の心なりけり』

治道『三五の神の大道に入りしより
いつも心は春めき渡りぬ。
花と花月と月との夫婦連れ
花の都へ清くつきませ。
大空に冴ゆたる月の影見れば
笑ませ玉ひぬ今の話に』

伊太彦『大空の月の御神の笑ませるは
夜光の玉をみそなはしてならん。
大空に夜光の月は輝きて
我懐の玉に照りそふ。

ウバナンダ、ナーガラシャーの珍寶
我懷に光らせ玉ふ。
願はくばこれの光を友として
常夜の暗を照らしてや行かん」
艫に立つて船頭は櫓を操り乍ら聲も涼しく謠ひ出した。
「こゝは名に負ふスーラヤ湖水
水の深さは底知れぬ。
底知れぬ神の惠と喜びに
會ふた伊太彥神司。
初稚の姫の命の玉の舟

さぞや見たからうブラバーダ姫を。
ウバナンダ龍王さんの寶をば
乘せて漕ぎ行く此御船。
風も吹け波も立て〳〵龍神躍れ
いつかなこたへん神の舟。
玉國別の神の司の居ます舟に
醜の惡魔のさやるべき。
スーラヤの山は霞に包まれて
今は光も見わずなりぬ。
夜光るスーラヤ山も伊太彥の

神の身靈に暗くなる。
これからは百里を照らした山燈臺も
消えて跡なき波の泡。
月も日も波間に浮ぶスーラヤ湖水
今日は天女が渡り行く。
天人の列に加はる神司
嘸や心が勇むだらう。
漸くにエルの港が見えかけた
かすかに目につくエルの山。
十五夜の月は御空に有明の

朝も早うから船を漕ぐ。
エル港越へて進むはエルサレム
一度詣り度や神の前。
朝夕に波のまに〳〵漂ふ俺は
何時も月日の水鏡見る。
毎晩光つて居たスーラヤ山も夜光の玉が伊太彦の懷に入つてからは光を失ひ、今船頭の謠つた如く唯一の燈臺をとられて了つた。十六日の滿月は東の波間より傘の樣な大きな姿を現はして昇り初めた。
波に姿を半分出した時は丁度黃金山が浮いた樣に見えて來た。
玉國別『金銀の波漂ひし湖の上に

黄金山の光輝く。
東の波間を昇る月影は
黄金の玉か夜光の玉か。
如意寶珠黄金の玉も及ぶまじ
波間を分けて昇る月影」

眞純彦「空清く海原清き中空に
月はおひ〳〵圓くなり行く。
月々に月見る月は多けれど
今宵の月は殊更清し」

三千彦「御恵みの露は天地に三千彦の

今さし昇る月の大神。
瑞御靈早くも月は波間をば
離れて御空にかゝりましけり」

伊太彦「波間をば分けて出でたる如意寶珠
我懐の玉に勝れる。
夜光る珍の寶珠も瑞御靈
昇り給へば見る影もなし」

デビス姫「眞純彦三千彦司の守ります
珍の寶も月に如かめや。
月の國ハルナの都へ進み行く

旅路の空に清き月影」

治道「大空に昇り輝く月見れば
我魂の耻しくなりぬ。
日は西に早や傾きて東の
波間を出づる珍の月影」

玉國別「西へ行く我一行を見送りて
昇らせ玉ふか月の大神。
仰ぎ見る清き大空隈もなく
照らし玉ひぬ一つの玉に。
日は暑く月は涼しく澄み渡る

百の草木も露に生きなん」

伊太彦「朝日は照るとも曇るとも　月は盈つとも虧くるとも
假令命は失するとも　誠の神の御教に
任しまつりし我々は　如何なる枉の攻め來とも
必ず神の恵みあり　歡喜龍王の岩窟に
一行五人進み入り　邪氣に襲はれ我魂は
浮世にけがれし肉体を　脱けて忽ち死出の旅
枯野ケ原をさまよひつ　ウラナイ教の高姫が
醜の精霊に廻り合ひ　いろ〳〵雑多と論爭ひ
揚句の果ては大喧嘩　おつ初めたる耻しさ

アスマガルダは鐵拳を
流石の高姫驚いて
枯木林に身をかくし
我等五人は勇み立ち
枯野ケ原をさまよひつ
三五教の信仰を
その報ひにや神使
高姫司の守護神
追ひやり玉へば忽ちに
いと苦しみし我身体
かためて高姫打たんとす
裏口あけて裏山の
雲を霞と消ねにける
凱あげし心地して
神の試練に會ひ乍ら
生命にかへて守りたる
スマートさんが現はれて
銀毛八尾の惡狐をば
四邊の光景一變し
俄に快くなりて

勇氣日頃に百倍し
感謝祈願の太祝詞
神の司の初稚姫が
我等が迷ふ靈身を
氣をとり直し四邊をば
歡喜龍王の岩窟と
こゝに龍王は初稚姫の
多年の苦悶を免れしと
感謝の言葉奉り
手づから渡し玉ひつゝ
天地の神に打向ひ
唱ふる折しも三五の
此場に現れましまして
明きに救ひ玉ひけり
よく〳〵見ればこは如何に
判りし時の嬉しさよ
生言霊に歡喜して
喜び勇み幾度か
夜光の玉を伊太彦に
別離の歌を宣りおへて

大空高く昇りけり
神の恵の有難さ
海に通ずる岩窟の
探り出づれば有難や
波打際に横たへて
待たせ玉ふぞ尊けれ
月は盈つとも虧るとも
幾千代迄も忘れまじ
大空清く海清く
清き眞帆をば揭げつゝ

あゝ惟神　々々
初稚姫に從ひて
光を見當てに隧道を
我師の君は玉の舟
我等を救ひ玉ふべく
朝日は照るとも曇るとも
神の恵みと師の恵み
思へば〳〵有難や
月亦清き玉の舟
清けき風に送られて

清き教の司等と
珍の都へ指して行く

あゝ惟神　々々
御靈幸はひましませよ」

清き話を取交はし
我身の上こそ嬉しけれ

斯く互に歌を謠ひ或は雜談に耽り乍ら、翌日の東雲頃玉國別の舟はエルの港に着いた早くも初稚姫は一行と共に上陸し玉ひてスマートを引連れ波止場に立つて一行の來るを待ち受け玉ひつゝあつた。スマートは喜んで「ウワッ〳〵」と泣き立てゝ居る。

（大正一二、五、二五、舊四、一〇、於龍宮館　北村匡光録）

第一六章　諒解（一六二三）

初稚姫は、早くもエルの港につきたまひ、アスマガルダ、ブラヴーダ、カークス、ベース、スマートと共に阜頭に立つて玉國別の船の進み來るを待ちつゝあつた。船は漸くにしてエルの港についた。玉國別は嬉しゆに船より一行と共に登り來り、初稚姫の前に立つて一禮を終り

玉國別「スーラヤの清き湖漸くに
　神の惠に渡り來にけり。
　初稚姫珍の命は逸早く
　　着きたまひたる事の尊さ」

初稚姫「湖の面を眺めて幾度か
　待ちあぐみけり君の御船を」

眞純彦「金銀の波漂ひし此湖も
　初稚姫の輝きにしかず。
　浪の上ゆエルの港を眺むれば
　　輝り灼きぬ珍の御姿」

三千彦「月は盈ち潮みち船に人も滿ち
　心みちつゝ浪路渡り來ぬ。
　恙なく神の惠に渡り來し
　　此湖に別れんとぞする。

別れ路のつらさは浪路にもあるものを
伴ひたまへ初稚姫の君」

初稚姫「皇神の御言畏み進む身は
神としあれば伴は頼まじ」

デビス姫「惟神道往く人は唯一人
進む掟を知らずありけり。
如何にせば神の御心に叶ふらん
我背の君と共にある身は」

ブラヴーダ「妾とて神としあれば草枕
一人の旅も如何で恐れん。

さりながら神の許せし背の君に
別れて如何で進み得ざらめ」

初稚姫「大神のまけのまに〳〵進む身は
如何でか人を力とやせん。
三五の神の御規は唯一人
道つたへ行くぞ務めなりけり」

治道「あら尊初稚姫の御言葉
我魂の暗を晴らしぬ」

玉國別「大神の御言畏み進む我に
一人はゆるせ初稚の君」

初稚姫「汝こそは神の依さしの神司
　　やすくましませ眞純彦と共に」
伊太彦「これはしたり三千彦さんの眞似をして
　　思はず知らず暗に迷ひぬ」
伊太彦は阜頭の石に腰打ちかけ、双手を拱んで何事か思案に暮れて居る。其兩眼には涙さへ滴り、さも懺悔の情に堪ねざるものゝ如くであつた。ブラヴーダは心も心ならず伊太彦の前に躙り寄り
ブラヴーダ「もし我脊の君樣、貴方は俄に勝れさせられぬ御心持、何か心配な事が出來て參りましたか、お差支無くは私に仰有つて下さいませ。夫婦となれば何處迄も苦樂を共にするのが天地の道でムいます」
伊太彦は首を左右に振り、聲までかすめて
伊太「ブラヴーダ、どうか今迄の緣ちやと諦めて、此伊太彦を許して吳れ。一生の御願ひだ」
ブラヴーダ「何がお氣に障つたか知りませんが、つい初稚姫樣の御言葉に從つて貴郎の御船を離れお先に參つたのが御意に障つたのでムいませう。誠に濟まない事を致しました。此後はきつと貴方の身邊を御保護致しますからお許し下さいませ」と涙ぐむ。
伊太「いや〳〵決してそんな事を彼是思ふのではない。お前は初稚姫樣のお伴をして大變結構であつた。天晴ハルナの都に參つて神命を果し其上神樣のお許しを得てお前と夫婦になれるものならなりませう。此伊太彦はお前と別れたならば一生獨身生活

をして神界に仕へる積りだ。お前は是から私に離れて家に歸り、兩親に孝行を盡し、適當の夫を選んで安樂に暗してくれ。併し一たん別れても緣さへあれば又添ふ事も出來るだらう。初稚姫樣のお言葉と云ひ、ウバナンダ龍王の言葉と云ひ、もはや此伊太彦は立つても居てもおられなくなつて仕舞つたのだ」

ブラヴーダ「若し玉國別樣、初稚姫樣如何致しませうか。何卒我々夫婦に對しお指揮を下さいませ」

玉國別は、ア、と云つたきり涙を拭ひ乍ら默然として俯き深き吐息をついて居る。

初稚姫「別れてはまた遇ふ海の末廣く
男浪女浪に浮ぶ月影」

玉國別「初稚姫樣の今のお歌によれば、伊太彦、可愛さうだがお前は此所からブラバーダ姫と袂を分ち天晴神業成就の上、改めて夫婦の契を結んだがよからう。ブラヴーダ姫も御承知でムいませうな」

ブラヴーダ「如何にもお情の籠もつたお言葉、左樣ならば大切なる夫の御神業を妨げてはなりませんから、此處で潔う別れませう。併し乍ら此ま、家に歸る譯には參りませんから、妾もどうぞハルナの都の御用に立てゝ下さいませ。伊太彦樣左樣ならばこれでお別れ致します。どうぞ御無事で天晴御神業を果し、皇大神の御前に復命遊ばすやうお祈り致します」

玉國別は莞爾として左も愉快氣に

玉國別「ブラヴーダ姫さん。貴女のお覺悟は實に天晴なものでムいます。しからば此上は貴女は唯お一人でエルサレムに參拜し、夫れよりエデンの河を渡り、フサの國に

出でハルナの都にお進みなさい。きつと神樣がお助け下さいますから。あゝ私も互に助け助けられて此處迄出て參りました弟子達に別れるのは殘念ですが、どうも神樣の掟を破る譯には參りません。併し、素盞嗚の大神樣から、眞純彦、三千彦、伊太彦の三人を伴ひ行く事を許されましたが、今となつて考へて見れば大神樣はさぞ「玉國別は腑甲斐ない奴だ」とお心の中にお蔑みなさつたらうと今更慚愧に堪へません。併し乍ら初稚姫樣のお許しで眞純彦一人を連れて參る事に致します。伊太彦は獨り是からエルサレムに玉を納め、フサの國を横斷してハルナの都に進んだらよからう。三千彦お前も一人でお出なさい」

伊太彦、三千彦、ブラヴーダ、一度に頭を下げ涙を滴らしながら本諾の意を示して居る。

玉國「ア、それで玉國別も安心致しました。初稚姫樣の神懸してのお言葉によりまして我々も迷ひの夢が醒めました。有難うムいます」

と合掌滂泣してゐる。

デビス姫「いざさらば神の敎の三千彦よ

別れて遇はんハルナの都で。

初稚姫玉國別の神司やすくましませ妾はこれにて暇をつげん」

と云ふより早く一同に目禮し、早くもエルの町の中に姿を隱して仕舞つた。これより初稚姫命により。アスマガルダは我家に歸り、ブラヴーダ、デビス姫は思ひ〳〵に人跡なき山を越へ谷を渡り、エルサレムに進む事となつた。伊太彦、三千彦ら亦玉を捧持し一人旅となつてエルサレムに進み往く。初稚姫はスマートと共に何處ともなく

姿を隠したまふた。治道居士は自分の幕下なりし、バット、ペル並にウラル教より歸順したる、カークス、ベースの四人を從へ各自比丘の姿となつて、エルの港にて法螺貝を嬪ひ、金剛杖をつき大道を進んでエルサレムに詣づる事となつた。今後に於ける各宣傳使の行動は果して如何に開展するであらうか。

（大正一二、五、二六、舊四、一〇、於天聖社樓上　加藤明子錄）

しら梅のよろづの花に魁けて　眞如

薫るはやまと心なりけり

第一七章　峠の涙（一六二四）

ハルセイ山の峠の頂上に古き木株に腰打掛け、疲れを休むる一人の男、過ぎ來し方の空を眺めて獨語、

男「春過ぎ夏も去り、漸く初秋の風は吹いて來た。名に負ふ夏の印度の國も、此高山の峠に登つて見れば、ヤハリ秋の氣分が漂ふて居る。玉國別の師の君に從ひ風荒ぶ冬の頃、齋苑の館を立出でて難行苦行の結果、漸くこゝ迄來るは來たものゝ、我身に積る罪惡の重荷に苦しみ、もはや一歩も歩けなくなつて來た。あゝ如何にせば我罪を赦され、神の任さしの使命をば果すことが出來やうか。スダルマ山の山麓にて我師の君に別れ、スーラヤ山の岩窟にナーガラシャーの寶玉を得んと勃々たる野心

に駈られ、カークス、ベースの兩人を道案内にして、漸くにして、スダルマの湖水の一角に辿りつき、ルーブヤが家に一夜の雨宿り、ゆくりなくもブラヴーダ姫に見そめられ、ハルナの都に上る途中とは知り乍らも、同僚の三千彦が嬪に倣らひ、師の君の許しをも得ずして、神勅を楯に自由の結婚談を定め、それより夫婦氣取りになつて兄に送られ、スーラヤ山に登り五大力とか何とか稱する神に途中に出會し、いろ〳〵の教訓を受け乍ら、妖怪變化とのみ思ひつめ、死線を越へて、岩窟に忍び込み、界現界の境迄一行五人は進み入り、高姫の精靈の試しに會はされ、神の化身に助けられ、漸く蘇生し、又ちや蒲王に辱られ、初稚姫樣のおとりなしによつて此通り夜光の玉を頂き、一先づエルサレムを指して上る此伊太彦が體の痛み、死線の毒にあてられし其親苦は今に殘れるか、頭は痛み胸は苦しく、足はかくの如く痛れ上り、もはや一足さへ進まれぬ。吾は如何なる因果ぞや。許させ玉へ天津神、國津神、玉國別の我師の君よ。惟神霊幸倍坐世。それにつけてもブラヴーダ姫は孱弱き女の一人旅、何處の野邊にさまようであらうか。山野河海を跋渉したる此伊太彦の健足でさへ、斯の如く痛むものを、歩みもなれぬ孱弱き女の身の、その苦しみは如何許りぞや。思へば〳〵初めて知つた戀のなやみ、皇大神の御言葉と師の言葉には背かれず、さりとて此儘、思ひ切られぬ胸の苦しさ、最早かくなる上は吾はハルセイ山の頂きにて朝の露と消ゆるのではあるまいか。假令假にもせよ、千代を契つたブラヴーダ姫に夢になりとも一目會ふて、此世の別離が告げ度いものだ。あゝ如何にせん千秋の怨み、萬斛の涙、何れに向つて吐却せんや」

と、胸を躍らせ、息もたゆ〳〵に涙は雨と降りしきる。

かゝる處へ二人の仙人に擔がれて色青ざめ半死半生の態にて登つて來たのは夢寢にも忘れぬ戀妻のブラヴーダ姫であつた。伊太彦は一目見るより、嬉しさ、悲しさ胸に迫り、涙の聲を絞り、僅かに、

伊太「あゝ、其女はブラヴーダ姫であつたか。お前の其樣子、嘸苦しいであらう。此伊太彦も死線を越へた時のなやみが、まだ体内に殘つて居ると見た、今は九死一生の場合、せめては一目なりと、お前に合ふて天國の旅がしたいものだと思つてゐたのだ。あゝ斯樣の處で會はうとは夢にも知らなかつた。之も神樣の大慈大悲のおとりなし。あゝ有難し〳〵、惟神靈幸倍坐世」

と合掌する。ブラヴーダ姫は糸の如き細き聲を張り上げて息も苦しげに、

ブラヴーダ「あゝ嬉しや、貴方は我脊の君伊太彦樣でムいましたか。妾はまだ年端も行かぬ女の身、旅に慣れない屆弱き足許にて貴方に會ふた嬉しさ。スーラヤ山の險を越へ、生死の境に出入し、神の仰を畏みて、神力高き御一行樣に立別れ、踏みも習はぬ山道をトボ〳〵來る折もあれ、俄に體は疲れ果て、魂は宙に飛び、最早臨終と見ゐし時、此仙人の情によりて、漸くこゝに救ひ上げられ參りました。何卒伊太彦樣、妾の命は最早斷末魔と覺悟を致して居ります。此世の名殘に今一度、貴方のお手をお貸し下さいませ。さすれば假令此儘死するとも少しも此世に殘りはムいません。あゝ生みの父樣、母樣、兄樣が妾夫婦の事をお聞きなされば如何にお歎き遊ばす事であらう。そればつかりが黄泉路の障り、あゝ如何にせんか」

と伊太彦の側らに身を投げ出して泣き叫ぶ。其痛はしさ。流石豪氣の伊太彦も女の情にひかされて恩愛の涙に袖を絞り乍ら、

伊太『あゝ其方の云ふ事も尤もだが、大切なる神の使命を受けて、此夜光の玉をエルサレムの宮に獻じ、ハルナの都に進まねばならぬ身の上、假令肉体は亡ぶとも精靈となつてゞも此使命を果さねば、どうして神界に申譯が立たう。初稚姫を通しての大神様のお言葉、我師の君の御教訓、順序も守らねばならぬ神の使が、如何に戀しき妻の身なればとて、どうして妻の手を握る事が出來やう。もしも此玉の神靈が我懐より逃ぐる事あれば、それこそ末代の不覺、こゝの道理を聞分けて、ブラバーダ姫、そればつかりは許して呉れ。假令此世の運命盡きて靈界に至るとも、互に相慕ふ愛善の思ひは彌永久に失するものではあるまい。假令此世で長命をするとも日數に積れば二三萬日の日數、此短き瞬間に戀の魔の手に囚はれて幾億萬年の命の障害になるやうな事があつては、我も汝も、とり返しのならぬ罪惡を重ねゝばなるまい。眞に、其方を愛する伊太彦は、其女に無限の生命を與へ無窮の觀樂に浴せしめ度いからだ。必ず惡くは思ふては呉れなよ』

と息もちぎれ〳〵に苦しげに說き諭す。ブラバーダ姫は首を左右に振り

『いゝ〳〵、何と仰せられましても臨終の際に只一回の握手位許されない事がありませうか。戀に燃え立つ妾の胸、焦熱地獄の苦しみを救はせ給ふは我脊の君の御手にあり、假令未來に於て如何なる責苦に會ふとても夫婦が臨終の際に互に介抱をし相助け相救ふ事の出來ない道理がありませうか。物固いにも程がムいます。妾の心も少しは推量して下さいませ』

と云ひつゝ、伊太彦に縋り付かんとする。伊太彦は嚴然として、たかつた蜂を拂ふやうな態度にて金剛杖の先にてブラバーダ姫を突き除け、刎ね除け、

伊太「これブラヴーダ姫、慮外な事をなさるな。大神様のお言葉、我帥の君の御教訓を何とする考へであるか。今の苦みは未來の樂み、左樣の事に辨別のない其方とは思はなかつた。とは云ふものゝ、同じ思ひの戀しい夫婦、あゝ如何にせば煩悶苦惱を慰める事が出來やうか」

と胸に燒鐵あてし心地、差俯向いて涙に暮れて居る。二人の杣人は聲高らかに打笑ひ

杣人の一「アハ、、、、、扨ても〳〵固苦しい舊弊な男だな。最前からの二人の話を聞いて居れば隨分お目出度い戀仲と見ねるが、永い月日に短い命だ。未來がどうの、こうのと云つても、一旦死んだものが又生きる道理もなし、人間の命は水の泡と消ねて行くのだ。長い浮世に短い命を持ち乍ら、何開けん事を云ふのだ。これ〳〵夫婦の方、未來があるの、神樣が恐ろしいのと、そんな馬鹿な事云ふものではない。況して、二人の此斷末魔の樣子、死際になつて思ひ合つた夫婦が手を握つてならぬ事があるものか。それだから宣傳使と云ふものは時代遲れと云ふのだ。誰に憚つてそんな遠慮するのだ。これ伊太彦さんとやら、こんなナイスに思はれて据膳喰はぬ男があるものか。可愛がつてやらつせい」

伊太「あなたは此邊りの杣人、よくまア、ブラヴーダを御親切に助けて下さつた。又只今のお言葉、實に御親切は有難う厶いますが、未來を信ずる我々には、どうして、左樣な天則違反が出來ませうか」

杣の一「山の奥まで自由戀愛だとか、ラブ、イズ、ベストだとか、言ふ新しい空氣が吹いて居るのに、之は又古い事を仰有る。三五教と云ふ宗教は實に古臭いものだな。此廣い天地に自在に横行濶歩し、天地經綸の司宰をする人間が些々たる女一人に愛を注

いだと云つて、それを罰すると云ふやうな開けん神があらうか。もし神ありとせばそんな事云ふ神は野蠻神の、盲神だよ。いや宣傳使樣、惡い事は申しません。この可愛らしい、まだ年の行かぬナイスが之丈け、命の瀬戸際になつて、云ふ事を聞かんとは無情にも程がある。お前さんも、よもや木石でもあるまい。暖かい血も通つてゐるだらう。人情も悟つて居るだらう。吾々兩人がこゝに居つては、格好が惡いと思ひ、躊躇してるのではあるまいか。さうすれば吾々兩人はこゝを立除くから、泣くなり、笑ふなり、意茶つくなり、好きの通りにしなさい。おい兄弟、行かう。斯うして夫に渡して置けば、俺等も安心と云ふものだ」

柚の二『さうだな。兄貴の云ふ通り兩人が居つては格好が惡くて意茶つく事も出來まい此世の中は偽りの世の中だから、人の前では思ふ所を言葉に出し、赤裸々に自分の信念を吐く事は誰だつて出來まい。さうだ俺等が此處に居るので斷末魔の夫婦の別れを惜む事も出來んのだらう。そんなら兄貴、行かうじやないか」

伊太『もし〳〵柚人樣、決して御心配下さいますな。世間の人間のやうに我々は決して裏表はありません。思ふ處を云ひ、思ふ所を行ふのみです。我々は痩ても倒けても三五教の宣傳使、決して外面的の辭令は用ひません。それ故に天地の神に耻づる事なき二人の行動、貴方がお聞き下さらうが、少しも差支はムいません。何卒誠に濟みませんが、左樣な事を仰有らずに、もう暫らく私の最後を見屆けて下さい。おひ〳〵體は重くなり、足は一歩も歩けません。もし我々夫婦が此儘死んだならばウバナンダ龍王が持つて居た此夜光の玉をエルサレムへ持つて行く事が出來ません。何卒御面倒でせうが乘掛けた舟だと思つて息のある中に此玉を貴方に渡して置きますか

ら、貴方代つて何卒これをエルサレム迄行つて大神様へ奉つて下さいませんか。澤山はなけれども此懐の金を旅費として、神様の爲めと思つて行つて下さいませんか』

柚の一『ハ、、、氣の弱い男だな。お前も神の道の宣傳使ならば、何故も少し男らしくならないのか。醜い弱音を吹いて人に泣顔を見せると云ふのは不心得ではムらぬか喜怒愛樂を色に現さずと云ふのが男の中の男でムらうぞ』

伊太『成程、貴方のお説も尤もだが、人間は悲しい時に泣き、腹の立つた時に怒り、嬉しい時に笑ふのが本當の神心、喜怒愛樂を色に現はさぬ人間は僞り者か化物ですよ今日の世の中は、それだから虚僞虚飾、世の中が眞暗になるのです。我々宣傳使は之を匡正する爲、道々宣傳し乍らハルナの都に進むのです』

柚の二『成程一應御尤もだ。然し乍ら一枚の紙にも裏表がある。最愛の妻が臨終の願ひそれを聞かない道理がムいませうか。貴方は餘りに理智に走り過ぎる、情がなければ人間ではありませんよ。廣い心に考へて世の中は、さう狹く考へるものではありません。變幻出没窮まりなく、時に臨み變に應じ、うまく此世を渡つて行くのが、神の御子たる人間ではありますまいか。ナアお姫さん、さうでムいませう』

ブラヴ『はい、伊太彦さんのお言葉も御尤もなり、貴方のお言葉も御尤もでムいます』

柚の二『伊太彦さんのお言葉も御尤も、俺の言葉も御尤も、とはチット可怪しいぢやありませんか。どちらか、尤もと不尤もの區別がありさうなものだ。さアお姫様、貴女の思惑通りなされませ。斯うして樣子を考へて見れば、最早此世の別れと見ゐる。伊太彦さんも體に毒が廻り何れは死なねばならぬ命、生命のある間に互に手を握つ

て天國とかへ行く準備をなさいませ。決して惡い事は申しません」

伊太「ブラヴーダ姫初めお二人のお言葉、その御親切は骨身に浸み渡つて、何とも云へぬ有難さを感じますが、どうあつても私は神樣が恐ろしう厶います。神樣の敎の爲には如何なる愛も、如何なる寶も總てを犧牲にする考へですから、もう之きり何とも仰有らずに下さいませ。あゝ惟神靈幸倍坐世」

枘の一「扨ても〳〵固苦しい男だな。成程之では世に容れられないのも尤もだ。矢張バラモン敎が時勢に適當してるわい。俺も實はバラモン敎の信者だが、まだ一度も斯んな固苦しい宣傳使に會ふた事はない。押せども引けども少しも動かぬ千引岩のやうな宣傳使だな。斯樣な無情な男に戀をなさる姫樣こそ實に不幸なお方だな。あゝどうしたら宜からうかな」

（大正一二、五、二九、舊四、一四、於天聲社　北村隆光筆）

眞如

むつまじく敎の友のよりあひて
　誠の道をかたるうれしさ
ゐどみづの清く甘くてたゆまなく
　出るは深き神のみめぐみ

第一八章　夜の旅（一六二五）

伊太彦は、目の前に最愛のブラヴーダ姫が惱み苦しみ、最後の握手を求むるその心根の不愍さ、胸迫り嗚咽涕泣稍久しうし、又もや首をあげ涙を拂ひながら、

伊太「ブラヴーダ姫よ、お前がこの樣に苦しむのも私の意志が弱かつた爲だ。テルの里にて体よく斷れば、お前の迷ひもさめ、私も斯樣な神の誡めに遇ふのではなかつたのに、どうぞ許して呉れ。生死を共にすると誓つた女房の其女に、唯一度の握手をも許さぬと云ふ程伊太彦も無情漢ではなけれども、使命を受けた此の躰、假令肉体は朽果つるとも、何うして此誓ひを破る事が出來やう。本當に心の底から其女を愛するために、かゝる無慘い所置をするのだ。決して無情な男とせめて呉れるな。伊太彦の思ひは千萬無量。如何なる罪の報ひにや初めて知つた戀の苦しみ、其女もルーブヤの娘、ブラヴーダと云はるゝ女、よもや伊太彦の言葉が分らぬ道理はあるまい」

ブラヴーダ「伊太彦さん、左樣ならばこれにてお暇を致します。隱世の大神守りたまへ幸倍たまへ」

と云ふより早く懷劍をすらりと拔き放ち、我喉に突き立てんとす。伊太彦は驚いて其手を押へんとすれども、刻々と重る病の爲手足も叶はず、如何はせんと氣を焦心り、あはや一大事と思ふ刹那、柚人は飛びかゝつてブラヴーダの懷劍を捲取り、傍の密林へ投げ込んで仕舞つた。柚人は忽ち容色端麗なる二人の美人と化した。伊太彦はハッと驚き差俯向く。ブラヴーダ姫も忽ち、以前の化身に彌益高尚優美なる女神と化して仕舞つた。伊太彦は漸うにして頭を擡げ見れば摩訶不思議、ブラヴーダ姫も、柚人の影

もなく、三人の女神が儼然として我前に立つて居る。扨てはブラヴーダと見せかけ木花咲耶姫の我前に現はれたまひしか、あら有難や辱なやと思はず知らず合掌した。

餓に伊太彦の病は拭ふが如く、忘れたるが如く、どこへか散り失せて、さも爽快な氣分に充たされ、坐り直つて兩手を仕へ、

伊太「ハハー、有難や尊や木花姫の命樣、どこ迄もお心を寵められたる御教訓實に感謝の至りに堪へません。何卒々々此伊太彦が途中に於て惡魔の誘惑に陷らざる樣御守護を願ひます。又ブラヴーダ姫も纖弱き女の一人旅、何卒々々御守護を願ひ奉ります」

木花姫「汝の願ひ確に承知した。併し乍ら、玉國別の身の上は何と致すのだ」

伊太「恐れ入りました。これだけのお試練に會ひながら、自分の身の上や妻の身の上のみをお願ひ申し、師の君の御身の上を後に致しました。どうぞお許し下さいませ」

木花姫「其方は、玉國別、眞純彦、三千彦の宣傳使は神德備はり、神の御加護も厚ければ、安心の上願はなかつたのだらう」

と直日に見直し聞き直したまふ情の言葉に、伊太彦は恐れ入り、兩掌を合せて感謝の涙を瀧の如くに流して居る。忽ち虛空に音樂聞ゑ、芳香薫じ、カラビンガの祥鳥に取まかれて雲を霞と御姿をかくしたまふた。後振りかへり、伊太彦は幾度となく御空を仰ぎ見て、

伊太彦「木の花の一度に開く伊太彦が
心の空も晴れ渡りけり。
天敎の山より天降りたまひたる

木花姫の惠尊し。
いたづきの身も健かになりにけり
神の惠の深きをぞ知る。
玉國別司の君は今何處
守らせたまへ天津神達。
仰ぎ見る眞純の空は我友の
心の色の現はれとぞ知る。
神德を清き御靈に三千彦の
我友垣を偲びてぞ泣く。
三千彦も嘸今頃はデビス姫に

心曇らせたまふなるらん。
デビス姫ブラヴーダ姫も御教に
倣ひて山路を一人往くらん。
鬼大蛇虎狼の猛ぶなる
野路往く人ぞ危まれける。
さりながら尊き神のましまさば
やすく進まん女の旅も
いざ立ちて珍の都に進み行かん
國治立の御あとたづねて」
と口吟みながら、元氣回復した伊太彦は、ハルセイの峠を宣傳歌を謠ひながら下り往く

伊太彦『三千世界の梅の花
此世を救ふ生神は
齋苑の館やエルサレム
自轉島の聖場に』
豐葦原の國中に
醜の大蛇や鬼神を
地上に建設せんために
嚴の御靈の御言もて
使はしたまふぞ尊けれ
神の御言を蒙りて

一度に開く時は來ぬ
天教山に神集ふ
コーカス山や天恩郷
嚴の御魂を配りまし
潜みて世人を惱ませる
言向け和し天國を
神素盞嗚の大神は
神の柱を四方八方に
我は小さき身なれども
玉國別の師の君と

魔神の猛る月の國
登る尊き神司
旭は照るとも曇るとも
假令大地は沈むとも
スダルマ山の麓にて
スーラヤ山に玉ありと
矢猛心の伊太彦は
間道潜りて三人連れ
思はぬ女に廻り遇ひ
八大龍王の隨一と

ペルナの都の征討に
任けられたるぞ有難き
月は盈つとも虧くるとも
誠の力は世を救ふ
カークス、ベースに廻り合ひ
聞くより心機一變し
我帥の許しを强請し
テルの磯部に安着し
妹背の約を固めつゝ
世に聞へたるウバナンダ

ナーガラシャーの岩窟へ　一行五人進み入り
幽世現世の境まで　進みし時の恐ろしさ
此世を造りし神直日　心も廣き大直日
見直しまして現世に　甦りたる尊さよ
折から來る宣傳使　初稚姫に助けられ
岩の隙間の明をば　目當に潜り出で見れば
玉國別の師の君が　磐樟船を横たへて
我等を待たせたまひけり　あゝ惟神々々
神の經綸のはかりなき　千尋の海も何のその
御稜威は高くスメールの　山も物かは伊太彦は

喜び勇み師の君の　御船に乗りてエル港
順風に眞帆をかゝげつゝ　事なく上ればこは如何に
初稚姫の一行は　阜頭に立たせ給ひつゝ
いと懇に待ちたまふ　我師の君の一行は
無事の再會喜びつ　前途を祝する折もあれ
初稚姫の御教訓　畏みまつり最愛の
妻に袂を別ちつゝ　夜光の玉を捧持して
珍の都に上り往く　一人旅路となりにける
夜を日に次いでハルセイ山の　峠の上に來て見れば
頭は痛み胸つかへ　手足も自由にならぬ身の

其苦しさに山頂の
感謝祈願を凝らしつゝ
二人の柚にたすけられ
一人の女は誰人と
夢にも忘れぬブラヴーダ
心を鬼に持ち直し
心の中の曲者と
漸く晴れし胸の暗
いとも畏き木の花姫の
二人の柚と見ゐたるも

芝生の上に座を占めて
懺悔の涙に暮るゝ折
命辛々登り來る
窺ひ見ればこは如何に
妹の命と知りしより
神の使命を守らんと
力戰苦闘の其結果
ブラヴーダ姫と見ゐたるは
珍の化身にましまし
木花姫のお脇立

かくまでいやしき伊太彦を
千々に心を碎きます
天尊樣の御情
あゝ惟神々々
これより進んでエルサレム
誠の道を一筋に
旭は照るとも曇るとも
假令大地は沈むとも
神に受けたる此魂
直日に見直し聞直し

誠の司に造らんと
三十三相の觀自在
仰ぐも畏き次第なり
身も健かになりぬれば
我師の君の後を追ひ
脇目もふらず進むべし
月は盈つとも虧くるとも
我身体は朽つるとも
如何で曲靈に汚さんや
宜り直しつゝ惟神

敎のまゝに進み往く
秋の色をば堪へつゝ
空吹く風に飜へり
あゝ惟神々々
神の表はれましまして
埴安彦や埴安の
鎭まりたまふ大前に
進ませたまへと願ぎまつる」

と謠ひ乍ら緩勾配の山道をトントン〳〵と下り行く。日は西山に傾いて殊更涼しき夕の風、伊太彦が面を吹く。伊太彦は漸くにしてさしもに高き此大峠の中程迄下りつき傍の巖に腰打ちかけて、ウトリ〳〵と眠りについた。斯かる所へ峠の上の方から、四邊の景色は漸くに
山野の木草はさわ〳〵と
いとも床しくなりにけり
一日も早くエルサレム
黄金山下の神館
姫の命の永久に

イク「バラモン敎に仕へたる醜の司のイク、サール
高春山の岩窟で　松彦司に敎られ
三五敎の正道に　歸順しまつり治國別の
神の司に從ひて　伊太彦司と諸共に
祠の森の宮普請　仕へまつりて師の君に
惜き別れを告げながら　珍の舘の受付に
暫し仕ふる間もあらず　三五敎の高姫や
妖幻坊の杢助が　ブラリ〳〵とやつて來て
暴威を振るふ憎らしさ　斯かる所へ靈國の
天女と現れし初稚姫が　立ち寄りまして妖邪をば

拂はせたまひ我々に
又もや聖場を立ちたまふ
其神德に憧憬し
仕へんものと後や先
此世を照らす生神の
與へられたる嬉しさに
誠一つを力とし
初稚姫は今何處
今は全く我耳に
あゝ惟神　々々

尊き教を傳へつゝ
我等二人は姫君の
ハルナの都の御伴をば
姫の御身を守りつゝ
日の出の神に瑞寶を
姫の許しはなけねども
此處迄進み來りけり
スマートさんの聲さへも
聞へず遠くなりにけり
神の惠の幸はいて

一日も早く姫君に
清き尊き龍聲を
山野河海を打ち渡り
此處迄御身を守りつゝ
來たりし我等の有難さ
高春山の岩窟で
伊太彦司の身の上は
聞かまほしやと思へども
如何に詮術浪の上
登りつ下りつ進み來る

過はさせたまへスマートの
聞かさせたまへと願ぎまつる
影に日向につき添ひて
水晶玉を捧持して
あゝ惟神　々々
いと懇切に交はりし
如何になり行きたまひしか
神ならぬ身の我々は
踏みも習はぬ山路を
あゝ惟神　々々

皇大神の引き合せ
　　伊太彦司に今一度
遇はさせたまへと願ぎまつる」

と謠ひつゝ峠を下つて來るのはイクであつた。伊太彦は疲れ果てゝ、ウトリ〳〵と眠つて居る耳に幽かに此聲が聞ゑて來た。ふと目覺せば、二人の男が我前に近づいて來る事に氣がついた。

（大正一二、五、二九、舊四、一四、於天聲社樓上　加藤明子錄）

第五篇　神檢靈査

第一九章　仕込杖（一六二六）

イク、サールの兩人は伊太彦の路傍の石に腰打掛、俯向いてる姿を見て、月影にすかし乍ら、

イク『貴方は旅人とお見受け申しますが、一寸物をお尋ね申します。天女のやうな綺麗な〳〵姫樣が犬を連れてお通りになつたのを御覽になりませぬか』

伊太彦はハテ不思議な事を尋ねるものだと思ひ乍ら、二人の顏をツラ〳〵眺めて、

伊太『イヤさう聞く聲は何だか聞き覺えがあるやうだ。拙者は三五敎の宣傳使、伊太彦と申すもの、左樣なお方はお通り遊ばしたのは見た事はムらん』

サール『やアお前は伊太彦さんじやないか。高春山の岩窟では隨分管を捲いたものだな

其後玉國別さんに跟いてハルナの都へ進まれた筈だが、まだ斯んな處へ迂路ついてムつたのか」

伊太「うん、君はイク、サールの兩人だな。これは〳〵珍らしい處で會ふたものだ。そして又初稚姫樣の後を何處迄も慕ふて行く考へかな。初稚姫樣がよくまアお伴を許された事だな」

サール「何と云つてもお許しが無いものだから、强行進軍と出掛け、見ねつ隱れつ、後になり前になり、こゝ迄ついて來たのだが、エルの港からサッパリお姿を見失ひ、前になつてるのか、後になつてるのか分らぬので心配してるのだ」

伊太「あ、さうだつたか。拙者も初稚姫樣に一度會つてお禮を申し度いのだが、あの方は神樣だから變幻出沒自在、何方へおいでになつたか皆目分らんのだ。まアゆつくり一腹し玉へ。まだ此阪道は隨分あるさうだから、慌た處が仕方はない。チッとは人間の身体も休養が大切だ。休んでは歩き、休んでは歩きする方が、身体の爲にも何程よいか分らないよ」

イク「久し振りで伊太彦さんに面會したのだから、先づ此處で、ゆつくりと話して行かうぢやないか」

サール「久振りだと云ふけれど、スマの關所でお前が宿屋をやつて居た時に入口に守衛然と控へて居つたぢやないか。云はゞ伊太彦司等の救ひの神さんだ」

イク「成程、あの時に伊太彦司も居られたのかな。あまり澤山のバラモン軍で見落して居たのだ。そして初稚姫樣に叱られるものだから、スマの里を一目散に驅け出し姫樣を待ちつゝ、彼方此方とバラモンの泥棒を言向和して來たものだから今になつたの

だが、伊太彦さん、之から三人一緒にハルナの都へ行かうぢやないか。どうしたものか姫様はハルナへ行かずに、エルサレム街道の方へ足を向けられたものだから、跟いて來たのだが一体どうなるのだらうな」

伊太「神様のなさる事は到底我々には分らないよ。我師の君の玉國別様だとて、テームス峠を向ふへ渡り、直にハルナに行かれる都合だつたが、いろ〳〵神様の御用が出來たり、事件が突發して、何者にか引かるゝ様に此方へおいでになつたのだ。之も何かの神様の御都合だらう。然し乍ら三人一緒に行く事は到底出來ない。宣傳使は一人を極つてるさうだから初稚姫様も伴をつれないのだ。それで私も玉國別の師匠から途中から、突放されて一人旅をやつてゐるが、一人旅は辛いものゝ又便利なものゝ氣樂なものだ。何は扨て置き、神様の命令だから君等と一緒に行く事は出來ないわ。何れエルサレムで一緒にお目にかゝらうじやないか」

イク「それでも照國別、治國別、黄金姫様等は一人おいでになつたのでは無からう。あの方々はどうなるのだ」

伊太「それも何か御都合のある事だらう。俺等には解らないわ」

サール「おい、イク、そんな事云ふ丈け野暮だよ。初稚姫様は只一人おいでになつたのも獨立獨歩、一人前の宣傳使になられたからだ。黄金姫、清照姫が二人連れで行つたのは、半人前づゝの二つ一で行つたのだよ。其外の宣傳使は皆三人連れ四人連れだからまア三分の一、四分の一の人間位なものだ、アッハ、、、」

イク「さうすると伊太彦さんは偉いぢやないか。到頭一人前になられたと見にるわい。俺等も二つ一かな」

サール『きまつた事だよ。二人に一つの玉を頂いて居るのを見ても分るぢやないか』

イク『それでも伊太彦さんは一人でゐ乍ら玉がないぢやないか。そりや又どうなるのだ』

サール『改心の出來たお方は心の玉が光つてるのだから、形の上の玉は必要ないのだ。玉を持つて歩かなくちやならぬのは、ヤッパリ何處かに足らぬ處があるのだ。夜道が怖いと云つて仕込杖を持つて歩くやうなものだ。なア伊太彦さん、さうでせう』

伊太『さう聞かれるとお耻かしい話だが、實の所はスーラヤ山の岩窟に入り、ウバナンダ龍王の玉を頂いて此處に所持して居るのだ。ヤッパリ私も仕込杖の口かな』

サール『ヤア其奴ア不思議だ。あの八大龍王の中でも最も險呑な所に棲居をしてゐる死の山と聞いたスーラヤ山へ駈け上つて玉をとつて來るとは豪氣なものだ。そして其玉は今持つて居られるのか。一つ見せて貰ひ度いものだな』

伊太『ヤア折角だが神器を私する譯には行かん。叮嚀に包んで懐に納めてあるのだから、エルサレムに行つて言依別の神樣にお渡しする迄は拜む事は出來ないのだ。そしてお前達の持つて居る玉と云ふのは誰から頂いたのだ』

イク『勿体無くも日出神から直接に拜戴したのだ。此玉のお蔭で澤山な泥棒にも出會ひ色々の猛獸の原野を渡り、大河を越へて無事で來たのも、此水晶玉の御神德だ。伊太彦さんが玉が大切だと云へば、此方も大切だ。絶對的に見せる事は出來ませんわい』

伊太『それでは仕方がない、賣言葉に買言葉だ。自分の玉を隠しておいて、人の玉を見せろと云ふのが此方の誤謬だ。さアこゝで別れませう。エルサレムに行つて何れ十

日や二十日は我師の君も御修業遊ばすから、其間には一緒になるであらう。左樣なら」

と伊太彦はスタ〳〵と下り行く。

二人は伊太彦の言葉に從ひ後をも追はず、ゆつくりと路傍の岩に腰打掛け話に耽つてゐる。

イク『おい、サール、伊太彦が松彦に捕へられ、高春山の岩窟にやつて來た時は隨分面白い奴だつた。滑稽諧謔口を衝いて出ると云ふ人氣男が、あれ丈けの神格者にならうとは豫期しなかつた。何と人間と云ふものは變れば變るものじやないか。我々二人は初稚姫樣のお伴も許されず、日蔭者となつて、斯う春情のついた牡犬が牝犬を探すやうに後を嗅つけてやつて來たもの、公然とお目にかゝる譯にも行かず、ハルナの都へ行つてから、「不屈な奴だ、何しに來た」と叱られでもしたら、それこそ百日の説法屁一つにもならない。何とか立場を明かにせなくては、「名正しからざるは立たず」とか云つて、マゴ〳〵して居ると其處邊四邊の奴に泥棒扱ひをされて、其上虻蜂とらずになつては詮らぬじやないか』

サール『何、神樣は心次第の御利益を下さるのだから、我々の眞心が姫樣に通らぬ道理が何處にあらう。姫樣は千里向ふの事でも御承知だから、自分等が斯うして跟いて來るのも御承知だ。之を默つて居られるのは表面は何とも云はれないが、實は跟いて來いと言はん許りだ。そんな取越苦勞はするな。さア行かうぢやないか』

イク『道の邊に憩ふ二人は尻あげて

またもや先へ行かうとぞする』

サール『此塲をばサールの我は何處へ行く
蓮花咲くハルナの都へ。
今先へ一人伊太彦宣傳使
逃げるやうにして玉抱へ行く』

イク『泥棒のやうな顏した我々を
恐れて逃げた伊太彦司』

サール『馬鹿云ふな此世の中に住む奴は
皆泥棒の未製品なる』

イク『バラモンの軍の君に從ひて
泥棒働ぎし我等二人よ』

サール『そんな事夢にも云ふて呉れるなよ
我等は最早神の生宮。
泥濘の泥の中より蓮花
咲き出づる例あるを知らずや』

イク『蓮花如何に清けく匂ふとも
散りては泥の埋草となる。
一度は祠の前で咲き充ちし
蓮なれども今は詮なし。
神の道聞く度毎に村肝の
心の垢の深きをぞ知る。

我胸にさやる黒雲吹き拂ひ
照らさせ玉へ水の光に。
伊太彦の神の司を規範として
魂研かまし道歩みつゝ」
二人は半時ばかり經つて又もや宣傳歌を謠ひ乍ら足拍子をとり下り行く。
「月の國にて名も高き　百の花咲き匂ふなる
ハルセイ山の大峠　三日三夜をてくついて
漸くこゝに來て見れば　思ひも寄らぬ三五の
伊太彦司が道の邊に　旅の疲れを休めつゝ
眠らせ玉ふ不思議さよ　思へば〳〵耻かしや
高春山の岩窟に　伊太彦司と諸共に
酒酌み交はし夢の世を　醉ふて暮せし我々も
心の駒を立て直し　祠の森に屯して
珍の宮居の神業に　仕へまつりし嬉しさよ
初稚姫の御後をば　慕ひてこゝ迄來て見れば
姫の姿は雲霞　行衛分らぬ旅の空
大空渡る月見れば　雲の御舟に乗らせつゝ
西へ〳〵と進みます　ハルナの都に姫樣が
進ませ玉ふと聞きつれど　月の御後を從ひて
一旦珍のエルサレム　進ませ玉ふが天地の

誠の道に叶ふのか
遊ばす事は我々の
測り知らるゝ事で無い
誠の道を一筋に
神は我等と共にあり
いかでか枉の襲はんと
頸に受けて逸早く
伊太彦司の後を追ひ
守らせ玉へ天地の
愼み祈り奉る

思へば〳〵神樣の
曇りきつたる魂で
只何事も惟神
行く處までも行つて見よ
人は神の子神の宮
敎へ玉ひし御宣言
水晶の玉を守りつゝ
いざや進まんエルサレム
皇大神の御前に
朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも
誠の道は世を救ふ
道行く我は惟神
神の集まるエルサレム
黄金山に參上り
神の惠の涼風に
進めや進めいざ進め
深き惠みにヨルダンの
生れ赤子となり代り
受けて尊き神司

假令大地は沈むとも
誠一つの三五の
月の御神の後追ふて
黄金花咲く神の山
橄欖樹下に息休め
心の塵を拂ふべし
勝利の都は近づきぬ
川の流れに御禊して
初稚姫の御許しを
榮えに充てる御顏を

伏し拝みつゝツク〳〵と　エデンの川を舟に乗り
フサの入江に漕ぎ出して　何のなやみも波の上
ハルナの都に進むべし　勇めよ〳〵よく勇め
神は我等と共にあり　あゝ惟神々〳〵
御霊の恩頼を玉へかし」
かく謡ひ乍ら、イク、サールの兩人はハルセイ山の西阪を勢込んで下り行く。

（大正一二、五、二九、於四一四、於天聖社楼上　北村隆光録）

第二〇章　道の苦（一六二七）

ブラヴーダ『月照彦の昔より　遠津御祖の仕へして
三五教の信徒と　テルの里庄のルーブヤが
家に生れしブラヴーダ　バラモン教の醜神の
教のために朝夕に　虐げられて表面
三五教を打ち捨て　バラモン教を奉じつゝ
家の柱に穴うがち　神の御名をば刻みこみ
密かに拝みまつりつゝ　時まつ程に三五の
神の司の伊太彦が　旭の如くに下りまし

父と母との許し得て
兄の命も嬉しみて
助けんためとスーラヤの
海抜三千有餘尺
進みて諸の苦しみを
入口迄も進み往き
いと懇にさとされつ
岩窟の隙よりぬけ出し
漸くエルの港まで
神の教に従ひて
妹脊の縁を結ばせつ
伊太彦司の神業を
湖水の波を打ち越えて
龍王の潜む岩窟に
味はひ遂に根の國の
神の恵の御教を
初稚姫に敷はれて
姫の御船に助けられ
安着したる折もあれ
いとしき夫に生別れ

踏みも習はぬ一人旅
道の小草をあけに染
今や麓につきにけり
大高山と聞えたる
聖地に渡る吾なれど
息も苦しくなりにけり
妖邪の空氣の体に
玉國別の師の君や
様子聞かまく思へども
遇はんよしなき旅の空
草鞋に足を食はれつゝ
杖を力にハルセイ山の
音に名高き月の國
此山越えてエルサレム
如何はしけん身は疲れ
死線を越へし其時の
未だ潜むと覺えたり
伊太彦司は今何處
神の戒め強くして
國に殘せし父母や

兄の命は嘸やさぞ
二人の身をば案じつゝ
畏き厳の御恵を
祈らせ給ふ事ならん
吾は孱弱き女の身
限りも知らぬ大野原
咲き匂へども百鳥は
言問ふよしも泣き逆吃
沙羅の古木に霊あらば
伊太彦司の消息を
晝はひねもす終夜
神に願ひをかけまくも
二人の上に與へよと
雲路遙に進み來る
後ふり返り眺むれば
蓮華の花は遠近に
聲も涼しく謠へども
此山口にたち並ぶ
吾が垂乳根や兄君や
完全に知らして呉れるだらう

あゝ惟神　々々
取り越し苦勞は禁物と
心に銘して忘れねど
拭はせたまへ惟神
朝日は照ると曇るとも
假令大地は沈むとも
此現世は云ふも更
つゞく限りは捨てはせぬ
進む我身は曲神の
心にひそ　曲者が
神に任しゝ此身体
教の言葉を身に刻み
又もや起る慕郷心
御前に願ひ奉る
月は盈つとも虧くるとも
三五教の御教は
我魂の何處迄も
誠一つの大道を
さやらん恐れなけれども
又もや頭擡げつゝ

清き乙女の魂を　　繼の暗路にさそひ往く
晴れぬ思ひの我體　　救はせたまへ惟神
御前に祈り奉る」

斯く謠ひながら、漸くにしてハルセイ山の峠を中程迄登りつき、茲に息を休めて越方行末の事を思ひ案じ、一人旅の淋しさに袖を霑して居る。日は漸く西山に沒し、四邊は薄墨の幕を卸したやうになつて來た。花は扉をとぢて眠りにつき鳥は塒をもとめて彼方此方の森林目蒐けて忙しげに翅を早めて居る。ブラヴーダ姫は獨言、

ブラヴーダ「あゝ味氣なき浮世ぢやなア、テルの里の酋長の娘と生れ、朝な夕なに三五の神樣を心私かに念じつゝ、幾度となくバラモンの司に虐げられ、心にもなきバラモンの信者となり濟まし、我一家は云ふも更、村人迄が心にも無き信仰を强られ、月に三度の火渡り水底潛り、裸体の修業、荊棘の室にと投ぜられ、是が神樣の御心を安める第一の勤めと、阿鼻叫喚の苦みを忍びて漸く孱弱き此身も十六の春を迎へ、天運茲に循還して、尊き三五教の神司と廻り會ひ、親子兄弟納得の上、夫婦の契を結び如何なる艱難辛苦も我背の君と一つにせばやと父母や兄に別れ、此處迄ほつ〳〵後を慕ふて來たものゝ、もはや一歩も進めなくなつて來た。あゝ如何にせば、此苦しみが免れるだらう。是も矢張表面を僞り、バラモンの神を祭り勿体なや大慈大悲の三五教の神樣をせま苦しい柱の穴を穿つて祭り込んだ其天罰が報ひ來たのであらうか、

「燈火をともして床の下に置くものはない」とは聖者のお言葉、其お言葉に背き、バラモンの惡神を尊敬して來た重々の罪業廻り來て、我身は如何なる苦しみを受けやうとも、最早因緣づくと諦めて決して恨みは致しません。神樣何卒、垂乳根の

父母や兄や、我背の君や村人の罪をお許し下さいまして、天晴御神業にお使ひ下さるやう、偏に願ひ奉ります。あゝ斯うなつては最はや諦めねばなるまい。あゝ俄に胸が痛くなつて來た。藥の持ち合せもない。もはや我身の罪を神樣にお許しを願ふ譯にもゆくまい。我罪が許されて、父母や我背の君に戒めが往くやうであつてはならない。どうぞ神樣、妾の身をお召し下さつて、一同の罪を許して下さいませ。それに付いても、戀しい伊太彦樣に臨終の際に一目お目にかゝりたいものだ。あゝどうしたらこの煩悶を消す事が出來やうぞ」

と一人道傍の草の上に腰を卸し、悲歎の涙に暮れて居る。猛獸の聲は四方八方より山岳も搖るぐ許り聞こて來た。遁氣丈のブラヴーダも此恐ろしき唸り聲には身の毛も彌立ち、死を決した身にも恐怖の浪の打ち寄する憐れさ。ブラヴーダは絶ゑ入る許り泣き叫びながら、路傍の草の上に身をなげ伏せてひし〳〵と泣き叫んで居る。

三千彦『三五教の宣傳使

山野を渡り河を越へ
種々雜多と村肝の
館の難儀を救ひつゝ、
デビスの姫を妻となし
キヨメの湖水を横斷し
廣き館を構へたる
神の惠に救ひ上げ
夜光の玉や如意寶珠
玉國別に從ひて
テルモン館に立ちよりて
心を碎き身を碎き
風塵茲におさまりて
我師の君と諸共に
アズモス山の山麓に
バーチル主從の命をば
タクサカ龍王を言向て
授かりながら師の君と

珍の都へ進み往く
エルの港につきし折
御稜威輝く初稚姫に
我師の君と袂をば
戀しき袂を別ちつゝ
いと雄々しくも進み往く
嶮しき峠の登り口
聲は地震か雷か
神の教を世に傳ふ
かく怖ろしき心地する

スーラヤ湖水を乘越にて
三五教の神柱
迷ひの雲を晴らされて
いよ〳〵別ちデビス姫と
踏みもならはぬ山野をば
此處は名に負ふハルセイ山の
俄に聞ゆる猛獸の
身の毛も彌立つ許りなり
我は男子の身なれども
此山路を何として

デビスの姫やブラヴーダ
思へば〳〵可憐しや
世人の爲めとは云ひながら
旅に出で立つ女子の
いとゞ憐を催して
あゝ惟神々々
我師の君は云ふも更
二人の纖弱き女子をば
いと易々と神業を
御前に謹み願ぎまつる

進まんよしもなかるべし
神の御爲道のため
かくも苦しき草枕
行末思ひ廻らせば
涙に袖はひたされぬ
御靈幸倍ましまして
デビスの姫やブラヴーダ
神の御稜威に守らせて
果たさせたまへ惟神
旭は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも　假令大地は沈むとも
誠一つの三五の　教を進む我なれば
怖るゝ事はなけねども　神の教も悟り得ぬ
弱き女の如何にして　此難關を越ゆるべき
守らせたまへ天地の　皇大神の御前に
謹み願ひ奉る」

三千彦はかく謠ひ乍ら、厭らしい唸り聲のする山路をとぼ〳〵と登つて行く。幽かに聞ゆる悲しげなる女の泣き聲、耳に入るより三千彦は氣を取り直し、

三千「さてはあの泣聲は正しく女と見ゐる。此夜の山を通ふ女はよもや他にはあるまい正しく、デビス姫かブラヴーダ姫に間違ひなからん。いで一走り實否を探り見ん」

と俄に足を早め。爪先上りの山路を勢込んで上り行く。見れば道の傍の草の上に悲しげな女の姿が横たはつて居る。三千彦は驚き乍らツト傍により、

三千「もし〳〵お女中樣、此山路に唯お一人倒れて ゐるのは何處の人か、折惡く月は黑雲に包まれて、お姿はハッキリ分らねど、どうやらブラヴーダ姫樣の樣に思ひますが、もし間違つたらお許しを願ひます。私は決して怪しい者ではありません。三五教の宣傳使三千彦と申す者、サア早く起き上つて有し次第をお話し下さいませ」

ブラヴーダ姫は三千彦の情の籠もつた言葉にノアの方舟に出遇つた如く喜び、重き身をやう〳〵に起き上り、

ブラヴーダ「ハイ妾は伊太彦の妻でムいます。貴方は神德高き三千彦樣、ようまア尋ねて下さいました。何を云つても罪の多い此體、神樣の戒めに遇ひましたが、モウ一

足も歩けなくなつて、この草路に斷末魔の聲を絞つて耻し乍ら泣いて居りました」

三千彦は此体を見るより涙をハラ〳〵と流し聲迄曇らせ乍ら、

三千「御安心なさいませ。神様は屹度貴女の御身をお守り下さるでせう。否魂迄も永久に御守護下さいます。私が貴女をお連れ申してエルサレム迄お送り致し度いは山々ですが、神様の仰せは、貴女もお聞き及びの通り大層厳しくなりまして、御同行は叶ひません。併し乍ら人は心が肝腎でムいます。心さへ生々して居れば、肉体位は何の雑作もムいません。何程疲れたと云ふても休めば直に回復するものでムいます。氣を確にお持ちなさいませ。あゝ惟神　霊幸倍坐世。……あゝ三五教の神様、纖弱き女ブラヴーダをお救ひ下さるやう一重にお願ひ申します。夫れについてはデビス姫も纖弱い女の一人旅、何卒貴神の御恩寵をもつて無事に聖地に御參詣の叶ふやう、お取り計らひを偏に願ひ奉ります。あゝ惟神　霊幸倍坐世」

と合掌しながら二人の間には暫し無言の幕が卸された。猛獣の聲は一層激しく彼方此方の谷々より百雷の一時に落つるが如く響き來る。

（大正一二、五、二九、於四、一四、於天聖社　加藤明子録）

わが魂は神のさずけし寶なり
夢をろそかにあつかひそ人

眞　如

第二一章　神判（一六二八）

ブラヴーダはまだ十六才の娘盛り、初めて戀しき父母の家を離れ、二世の夫と契たる伊太彦力にエルの港迄ヤッと跟いて來た所、初稚姫の訓戒によつて、伊太彦は只一人の官傳の旅に赴く事となり、翼を取られた鳥の如く、足をもがれし蟹の如く、淋しさと悲しさに胸寒がり、せめてはエルサレムにて戀しき伊太彦に會はん事を一縷の望みとして、歩みも慣れぬ大野原を打渉り嶮き山路を越へて、漸く此處へ喘ぎ〳〵登りつめて來たのである。

死線を越へた時の邪氣体内に幾部分か殘りし事と長途の旅の疲れとによりて、最早、根盡き絶望の淵に沈み居る處へ、いとも凄じき猛獸の聲、彼方此方より襲ひ來る。淋しさ怖ろしさに魂も消ねん許り、バタリと道端に倒れ、決死の覺悟にて父母兄弟、夫の安全を祈りつゝ、悲しさ堪へやらず、聲を限りに泣き叫んでゐた所へ、三五教の宣傳使三千彦が突然現はれて來たので、地獄で如來に會ひたる如き心地しつゝ重き身を起し、やゝ落付きたる態にて、

ブラヴーダ『三千彦様、よくまア妾の斷末魔とも云ふべき難儀の場所へお越し下さいまして、情のお言葉を賜り、殆んど甦つた様な心地が致します。就きましては神様の仰せは一人旅との事でムいますが、貴方と妾とは別に夫婦でもなければ怪しき戀仲でもムいません。それ故道の三丁や五丁連れ立つて歩いた所で、別に神のお咎めはムいますまい。斯様な嶮き山路、せめて此峠を向ふへ下る迄、妾と一緒に行つて下さる譯には行きますまいかな。孱弱い女の頼み事、屹度貴方は肯いて下さるでせ

う。氣强いばかりが宣傳使のお役でも厶いますまい」

と退ッ引ならぬ釘鋸、三千彦も姫の窮狀を見て、只俯向いて吐息をついて居た。怪しき猛獸の聲は刻々に身邊に近寄る如く聞ゐて來た。

三千彦は如何はせんと、とつおいつ思案に暮れて居たが、

三千「エ、、まゝよ、人を救ふは宣傳使の役、假令罪惡に問はれて根底の國に落されようとも、此可憐な女を見捨てゝ行かれやうか。神素盞嗚の大神樣は世人の爲、千座の置戸を負ひ給ひしと聞く。我も大神の流れを汲んで世を救ふ宣傳使なれば、千座の置戸を甘んじて受けん。我身の罪を恐れて人を救はざるは却て神の御怒りに觸れやうも知れぬ。初稚姫樣のお言葉は、或は我々の心を試されたのではないだらうか。神ならぬ我々、どうして正邪善惡の區別がつかう。只我々が心で最善と思つた處を、ドシ〳〵行ふのが我々の務めだ。男子は斷の一字が實だ。小さい事に心ひかれて躊躇逡巡する事はない。私が此ブラヴーダ姫を見捨てゝ行かうものなら、必ず猛獸の餌食になつて了ふであらう。萬々一私が罪人の群に落ちても救はねばならぬ」

と大勇猛心を起し、ブラヴーダ姫の背を撫でながら、

三千「姫樣、必ず御心配なさいますな。神樣の敎は一人旅でなければならんと仰せられましたが、苟くも男子として孱弱き女の身を只一人見捨てゝ行かれませう。貴女を救ふた爲、私が神の怒りに觸れ、根底の國に落ちやうとも男の意地、覺悟の前で厶います。さア私が脊に負ふて此急阪を越ゐさして上げませう。決して御心配なさいますな。三千彦は最早覺悟を致しました」

ブラヴーダ姫は嬉しゆに

ブラヴーダ『あゝ世界に鬼は無いとやら、三千彦樣、よう云つて下さいました。貴方は妾を助けて、假令根底の國へ落ちるとも構はないと仰有いましたな。ほんに親切な宣傳使、妾も貴方の爲には假令根底の國へ落ちやうとも、少しも怨みとは思ひません。貴方のやさしいお言葉は、幾萬年の喜びを集めても代へ難く存じます』

と俄に妙な心になつて、乙女心のフラ〳〵と三千彦の胸に矢庭に喰ひつき、頰に口づけをした。

三千彦は驚いて後に飛び去り、

三千『これはしたり、ブラヴーダ樣、左樣な事を遊ばすと、それこそ天則違反になりますから、愼んで貰ひ度う厶います』

ブラヴーダ『妾は最早此通り手足も儘ならぬ身の上、どうせ死なねばならぬ此體、假令貴方に負はれて此阪を無事に越されても、到底エルサレムへ行く事が出來ますまい。最早死を決した妾、いとしい戀しい貴方の體に觸れて死にましたら、最はや此世に殘りは厶いません』

と犇々と泣き崩る、其可憐らしさ。三千彦は當惑の目をしぱたゝき、

三千『あゝ流石は女だな。まだ年も行かんから無理もないだらうが、こりや又ゐらい事に出會したものだ。エー、仕方がない。ブラヴーダ樣、貴女の自由になさいませ。三千彦も覺悟を致して居ります』

ブラヴーダは戀しき、懷しき、三千彦の胸にヒタリと抱きついて慄ふて居る。

そこへ下の方からスタ〳〵やつて來た一人の女は、折惡くもデビス姫であつた。デビス姫は此態を見て眉を逆立て乍ら、グッと睨まへて居る。三千彦、ブラヴーダは一

生懸命に抱きついて泣いて居るので、デビス姫が我前に立つて居るのも氣がつかなかつた。

ブラヴーダは蚊の泣く樣な聲で三千彥の胸に抱かれ、兩の手で頰を撫で乍ら、

ブラヴーダ『神德高き三千彥樣、何卒妾を末永く可愛がつて下さいませ。どうやら足の痛みも、貴方の御親切にして下さつた嬉しさで、忘れたやうで厶います。あゝ俄に氣分がサラリとして參りました。貴方にはデビス姫樣と云ふ立派を奧樣がおありですから、どうせ末は遂げられませんが、せめてお心にかけて下されば、それで結構で厶います』

三千『ブラヴーダ樣、貴女は本當に可愛いですね。然し乍ら貴女の仰有る通り、私には不恙な女房を持つて居りますから、到底貴女と添ひ遂げる事は出來ません。又私の友人なる伊太彥の妻とお成り遊ばした以上は、友人に對しても、どうして之が……貴女と添ふ事が出來ませう。貴女も愛しますが友人の伊太彥は層一層私は愛して居ります』

ブラヴーダ『ハイ、よう云ふて下さいました。何卒左樣なれば心の夫婦となつて下さいませぬか』

三千『あゝどうしたら宜からうかな。こんな事を聞くとデビス姫を女房に持つたが怨めしうなつて來た。何故私は伊太彥と朋友の緣を結んだんだらう。實に儘ならぬ世の中だな。こんな處をデビスが見やうものなら何程心の好い彼女でも屹度腹を立てるであらう。エーもう構はぬ、デビス姫でも伊太彥でも來るなら來れ、三千彥は此女の爲に罪人となる覺悟だ』

ブラヴーダ『死出三途、針の山、血の池地獄でも、貴方とならチッとも厭ひは致しませんわ』

三千彦は何となく心臟の鼓動烈しく、息苦しきやうになつて來た。そして顏一面に恥しさと嬉しさの焰が燃ゑて、俄に暑くなり舌さへ乾いて來た。

兩人は目も狂ふ許りうついとなつて、今や戀の魔の手に囚はれんとする時、

『若草の妻の命を振り棄てゝ
　薊の花に心うつしつ。

デビス姫誰も手折らぬ鬼薊と
　嫌はせ給ふか怨めしの聲』

三千彦は此聲にハッと氣がつき、よく〳〵見れば紛ふ方なきデビス姫が我前に立つて居る。

三千『ヤアお前はデビス姫ぢやないか、そこに何をして居る、不都合千萬な』

と狼狽へ紛れに反對に叱りつける。

デビス『オホ、、、、、三千彦樣の凄い腕には此デビスも驚きました。愛のない結婚は却て貴方に對し御迷惑樣、それよりも妾は之よりエルサレムに駈け向ひ、玉國別の師の君にお目にかゝり、此實狀を包まず隱さず申し上げますからお覺悟なさいませや』

三千『やア、デビス姫、さう怒つては呉れな。決してお前に愛が薄くなつたのではない今も今とてお前の事を思ひ煩つて居た所だ。さうした所がブラヴーダ姫が此處に倒れて居たゝめ、介抱を一寸申上げた處、こんな狂言が出來たのだ。タカガ十六才の

小娘、私だつてお前と見換る樣な馬鹿な事はせないから、こゝは神直日大直日に見直して機嫌を直して吳れ」

デビス「案に相違の貴方の爲され方、妾も女の端くれ、男子の玩弄物にはなりません。然し乍ら貴方は妾の命の親樣、決してお怨みは申しません。妾は只貴方樣のお氣に召すやうにして上げ度いのが本心でムいますから、自分の愛を犧牲に致します。何卒ブラヴーダ樣を大切にして、末永く添ひ遂げて下さいませ。斯うなつたのも皆妾が貴方に對する愛が足らなかつた爲です。そして貴方が天則違反の罪にお爲りなさらんやうに妾は今こゝで命を捨てゝ罪の身代りになります」

三千「一寸待つて吳れ。さう短氣を出すものではない。これには深い譯があるのだ。お前は今來たので、前後の事情を知らぬからさう云ふのだが、ブラヴーダ姫と私の間は潔白なものだ。惚れたの、好いたのと譯が違ふ。決して惚れはせぬから安心して吳れ」

デビス「オホ、、、菖蒲と杜若とぞれ丈け違ひますか、烏賊と鰯と、ぞれ丈けの區別がムいますか」

三千「いかにも章魚にも蟹にも足は四人前だ、アハ、、、」

と笑ひに紛らさうとする。

デビス「三千彦さん、措きなさいませ。そんな事で誤魔化さうとしても駄目ですよ。それよりも男らしう「デビス、お前には愛が無くなつたから別れて吳れ」と仰有つて下さい。蛇の生殺は殺生でムいますからな」

ブラヴーダ「もしデビス姫樣、何事も妾が惡いのでムいます。三千彦樣の罪ぢやムいませ

ん妾も危ない所を助けられ、その嬉しさに前後も忘れ、つひ戀の魔の手に囚はれて妙な考へを起しましたが、今貴女のお顔を見るにつけ氣の毒で、身につまされて、坐ても立つても居れなくなりました。何卒三千彦樣と仲よく添ふて下さい。妾は貴方に對する言ひ譯の爲めこゝで自害して相果てます。三千彦樣、之が此世のお別れ」

と云ふより早く守刀を取り出し、今や自害をなさんとする時しも、天空を焦して下り來る大火團は忽ち三人の前に落下し、轟然たる響と共に爆發して火花を四方に散らした。三千彦、ブラヴーダの二人はアッと呆れて路上に倒れて了つた。今迄デビス姫と見ねしは容色端麗なる一柱の女神であつた。女神は言葉靜かに兩人に向ひ、

女神「妾こそは天教山に鎭まる木花咲耶姫命であるぞよ。汝三千彦、ブラヴーダの兩人、ハルセイ山の惡魔に良心を攪亂され、今や大罪を犯さんとせし所、汝等の罪を救ふべくデビス姫と化相して、汝の迷夢を覺まし與へしぞ。以後は必ず愼んだがよからう。神は決して汝等を憎みは致さぬ、過失を二度なす勿れ」

と言葉嚴かに諭し給ふた。二人はハッと平伏し、

「ハイ有難う」

と僅に云つたきり、その場に泣き入るのみであつた。

三千彦「三五の神の惠みは何處迄も
　我魂を守り給ひぬ。
　若草の妻の命と現はれて
　　教へ給ひし神ぞ尊き」

ブラヴーダ姫「戀雲も今は漸く晴れ行きぬ

天津御空を照らす光に。
火の玉となりて下りし姫神の
御心思へばいとゞ尊し。
何故か怪しき雲に襲はれて
人夫戀し我ぞ悔しき」

三千彦「よしや身は根底の國へ落つるとも
汝救はんと思ひけるかな。
皇神の掟の網に縛られて
身の苦しさを味はふ今日かな。
いざゝらばブラヴーダ姫よ三千彦は

汝に別れて一人行かなん」

ブラヴーダ姫「なつかしき敎の君に立別れ
戀の山路を登りてや行かん」

斯く互に述懷を宜べ乍ら袂を別ち、三千彦はブラバーダ姫の追付かぬやうと上り阪を急ぎ行く。ブラヴアーダは又追付いては却て三千彦に迷惑をかけんも知れずと、故意とに足許を遲くして神歌を唱へ乍ら上り行く。

（大正一二、五、二九、舊四、一四、於天聖社　北村隆光錄）

第二三章　蚯蚓の聲（一六二九）

大き正しき癸の
新に建ちし天聲社
口述臺に横臥して
彌く六十三卷の
御空は清く地青く
戰ぎもしない夕間暮
玉國別の一行が
諸の惱みに遇ひ乍ら

亥年卯月の十四日
二階の一間に立て籠もり
遠き神世の物語
夢物語述べてゆく
垂柳は蕭然と
三五教の宣傳使
齋苑の館を立ち出て
スーラヤ山に鎭まれる

ナーガラシャーの瑞實を
受け取らせつゝ海原を
茲に一行恙なく
前途の光明樂しみて
神の司の初稚姫が
百千萬の宣言を
また伊太彦も謹みて
各自々々に唯一人
道に起りし物語

教の御子の伊太彦に
漸く越にてエル港
無事な顏をば合せつゝ
聖地に向ふて出でんとす
木花姫の勅もて
宜らせたまへば三千彦も
妹の命と立ち別れ
聖地を指して進み往く
いと細々と述べてゆく。

○

豐葦原の中津國
遠き神代の昔より
珍の聖地に名も高き
野立の彦や野立姫
埴安彦や埴安姫と
珍の教を垂れたまふ
神素盞嗚の大神は
由緒の深き靈場に
數多の司を敎養し
開かせたまふ尊さよ

大日の下の聖場と
定まり居ますエルサレム
黄金山に現れませる
御靈の變化在して
世に現はれて三五の
其大御旨を畏みて
島の八十島八十の國
敎の園を開きまし
仁慈無限の御敎を
バラモン敎を守護する

入岐大蛇や醜鬼の
汚れ果てたる地の上を
妬み嫉や恨みなき
作らんために千萬の
玉の御身を碎きつゝ
旭は照るとも曇るとも
假令大地は沈むとも
幾萬劫の末迄も
あゝ惟神　々々

○

醜の御靈を言向けて
神の御國に立て直し
誠一つの神の代を
艱みを恐れず遠近と
勵ませたまふ尊さよ
月は盈つとも虧くるとも
三五敎の御敎は
宇宙と共に變らまじ
神の御稜威の有難き。

若葉も戰ぐ神の園
頭を並べて泰平の
池に泛べる魚族は
金龍池に悠々と
いとたのもしく遊び居る
輝きたまひ神園を
木下の闇に潜むなる
神に體も魂も
體の筋や骨までも
闇に迷へる世の人を
梅は梢に靑々と
ミロクの御代を謠ひつゝ
惠の露を湛へたる
曇りし世界を知らず氣に
月は御空に皎々と
隈なく照らし給へども
曲の猛びは未だ絶へず
供へきつたる瑞月は
メキ〳〵と痛めつゝ
救はん爲に朝夕に

心を千々に碎けども
救はんよしも荒浪に
あゝ惟神々々

○

朝な夕なに身を碎き
生げる教を委曲に
神の御前に太祝詞
畏き瑞の御心を
夏の若葉の木下闇

○

知る人稀な今の世は
漂ふ船の如くなり
御靈幸倍ましませよ。
教御祖の殘されし
說き諭さんと朝夕に
清き願を掛け卷も
知らぬ信徒多くして
騷ぎ廻るぞうたてけれ。

和知の河水淙々と
露を湛へて流るれど
清き清水を汲む人ぞ
清き尊き皇神の
日頃の主張も打ち忘れ
設けて逃げ出すうたてさよ
高天原の大本は
濟す世界の大橋と
空吹く風と聞き流し
行方も知らぬ醜靈の
彌永久に御惠の
瑞の御靈にヨルダンの
いとも稀なる今の世は
教を輕んじ疎みつゝ
いろ〳〵雜多と口實を
皇大神の御教に
三千世界を天國に
敎へられたる言の葉を
大橋越へてまだ先へ
身の行先ぞ憐れなり

皇大神の試練に
悔ひ改めてかへるとも
何とはなしに疎ましく
又もや醜の曲津靈は
必要の時は大切に
一人歩みが出來だせば
極めこむ所どそしりつゝ
あてごも知らぬ法螺を吹き
誠の足らぬ僞信者
皆法則にあて箝めて
遇ひて漸く眼さめ
白米に籾の混るごと
初の如くなきまゝに
高天原の大本は
扱ひ旨く使ひつゝ
素知らぬ顏の半兵衛を
泡吹き熱吹き末遂に
煙の如く消えて往く
神の教を現界の
眞理ぢや非眞理ぢや不合理と

愚痴を唱ふる可笑しさよ
物識人も目に見ねぬ
全智全能の大神の
慢心するのも程がある
皇大神の御心に
あゝ惟神々々

○

科學を基礎とせなくては
承認せないと鼻高が
己が愚をも知らずして
何程知識の秀でたる
神の世界の有様や
御心如何で解るべき
唯何事も人の世は
任せて進めば怪我はなし
御靈の恩頼を願ぎまつる。

神の存在經綸を
下らぬ屁理屈並べ立て
世界に於ける學者ぞと
構へ居るこそおかしけれ
机の上にて習ひたる
實地に間に合ふ筈がない
いとあざやかに示すとも
出來ねば恰も水の泡
境遇に迷ふ亡者なり
心の眼暗くして
唯一の武器と飾りつゝ

○

山河早木三つの卷
學びの家に通ひつめ
畑水練生兵法
口や筆には何事も
肝腎要の行ひが
夢か現か幻の
肉の眼は開けども
一も二もなく智慧學を
進む御靈ぞ憐れなり。

彌々茲に述べ終る